

No 358/xxv

幸田露伴著

後編

心琴

版權所有

東京 嵩山堂出版
大阪

卷之三

卷之三

卷之三

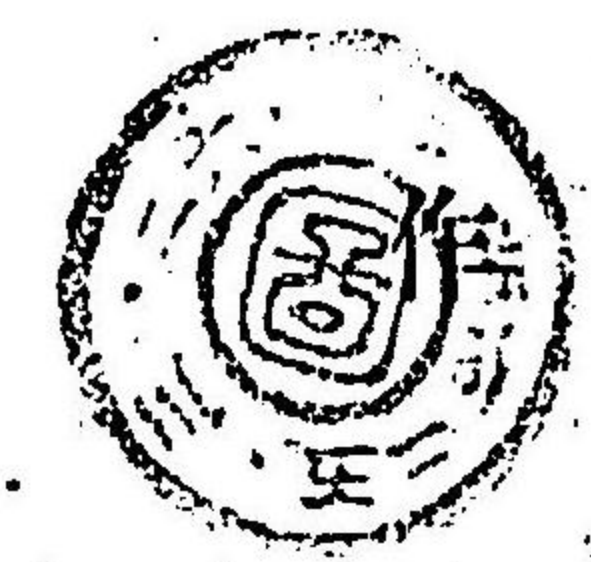
[Faint, illegible text on the left page]





うさなとり

露伴



後篇

第五十

後編

遠さうるまゝに藤の忍ばれて重なる山の恨めしきかきと顯昭が詠め
 るよハ引さかへ、露戀しくは加茂の川をも丸山をもれもはねど、波
 かけせども碗の苦屋ふ旅寐の袖濡れ、猛獸毒蛇の來らせとて岩が根
 枕夢屢々驚さの、とるく辛うじて此所までと來りし彦右衛門、絶
 体絶命の地に陥りて茫然と、いかにせん如何にかすべき我身をば置
 きどころなき此世の中、知る人の素より無き廣島の町に餓てや死ぬ
 べき終るべきと、流石に悲しくとなりしが、いやく我十四の頃よ
 へは是程の憂い目辛い目むと逢ひて馴れたり、身よ良からぬことの

編 後 り と な さ い

ありて人の面見るさへ恐ろしくねもへば自然心の弱りて、此間まで
は口さへわれを物と食へる牀軀さへわれバ衣類と着るゝとねもふ
て居し其食ふどか着るとかいふどとき卑劣なこと心を惱すやうな
りしたと餘りよ腑甲斐なし、乞食同様の業して其日其日幾里づゝか
歩行して僅に三四年前、今考ふれを左程苦しいことでも無かりしが
何時しの大人びたる辨れつきて今又舊のやうなこと爲むとすれば耻
のしきやら、それとも哀かふぬことせし報にて今は爲難く往時は神
詣りといふ清いことが目的なりし故に乞食も氣樂ふ出来しや、何に
せよ此齡にあつて最早到底餓死する迄も男兒一匹乞食はできだ、否
決して乞食さといふ爲まじ、いざさらば人に備はれてありと働くべし、
働いて僅少なりと得たるものお我口糊すべし、我が腕の油と食ひ我
が額の汗に着るべし、何れいたづらお人の憐れを乞ふべきものか

編 後 り と な さ い

と漸く心を決めても疲れたる足のいと重く、京橋町通りて京橋越し、
下柳町堀川町、元安橋より猫屋橋、商賣賑かよ町並美しきとあるを
我貧故よ心細く横眼で眺めながら過ぐる中、今朝飲みし水の中りて
か腹痛烈敷、重なる難儀これ堪へ通さでと脇よ手を當て顔に筋皺
見苦しく、遂に道端よ倒れるゝるところへ十一二の子僧引き連れし
六十前後の和尚通して、やれ若い衆氣の毒な、持ち合せし紫雪少し
進じましたよと子僧の手前ら遞與さるゝを、有り難うござりますると
頂いて服をせと猶苦しみ悶ゆるに、和尚は様子伺ふて、家の外の冷
い風よ當つて居てと何おせよ大毒、やゝもすれば一寸したことの道
中おでんの熱病にありやすいものおれば用心せられよ旅の人、此先
よ卿等の泊るべき宿れあれば其所まで堪忍して行くがよい、何ぢや
親切れ致と嬉しいが木賃宿にさへ泊れぬとか、それの又尙更笑止な、

僅なれども今貰ふて来た布施物、子僧よ其を此仁に進よと、幾許か知らせ情の籠る紙包み與へしや、飄然と去りぬ、彦右衛門禮云ふ間さへなく、扱も有難い和尚と後影伏し拜みしや、猶少時休む中藥の利しか何や歩行るゝに一生懸命只有る木賃宿よ入る途端氣の緩みよ眩暈きて、呀と倒れぬ

第五十二 廣島算盤屋よかゝる身

飛んでも無い者に舞ひ込れしと、亭主の知らぬ人にかくべき愛情持さねば、唯掛り合を恐れて一度は上り端に倒れし彦右衛門を突き出さんともせしが、流石に徳を有せる人れ心、惻愍の念の起り立つを欺きかねて、手荒きと見せ知らせの他人に向つての故あがら、まづ一杯の水吹きかくれば、定命はまだ盡ざる彦右衛門、息吹き返して有り難しといふも辛々、やうやく途切れく、言葉を發し、途中は

からせ水中りでもせしか此始末、とんた御厄介をかけたましたと云ひ紛らせども、實は空腹に無理歩きせし爲の眩暈、今宵の宿らせていたいませうと頼むやうにして、亭主の案内やさしくも病氣とあれバ鬱悒とも緩々加養して行あるゝがよいとの返辭に嬉しく、今貰ひし錢で米買ひ粥炊てもらひ、僅よろれを啜りし上幾日疲勞を休めに眠れば瘦せ蒲團も昨夜の野宿より頼もしく、ぐつすり寐入つて眼覚れば身ハ蒸されし如く熱り、五体浮くほどに汗烈しく、物の色すべて怪しく見ゆ、口中火を啣むやうな熱苦しうて手も萎へ力も抜け、頭重く岑々と痛むに、悲しや是の悪き病お罹りしか、山河隔てし他郷にありて誰知る人なき此家の中おて苦痛お呻くとい何たる因果ぞ、神も佛も助け玉へ此見る影なき彦右衛門を、よしや不義の罪と憎まれて此苦惱を與へ玉ふおせよ、身を省みれば斯る目お逢ふ

を恨みとはおもはねど、其罪の取り報しもあらざる中終ることのつ
くぐく口惜し、眞實我が罪の此病よて消るものならば猶幾層倍も苦
しむべし、唯生命だけり剩し得させ玉へ、是より後の我が行ひ、あ
れ神佛の御意よ叶ふやうきて後世を終りたき願ひ、此心の中照覽
ありて救ひせ玉へと遙に念を産土神や清水の觀音や、垢付汚
れし枕を両手ついで祈りよ心の眞實を抽く可憐さ、人の此様あとき
元來の音を吐き出せものあり。

一日二日とありて猶快癒らば、幸ひ宿の亭主が徳の外は何も知らぬ
といふ男で無うて、醫者どの手の届ぬを買ひ薬も頼めば良いのを
と探して来て呉れ、振り出しの世話粥の面倒、左はを厭な面は爲で
仕てくるよに、有る錢なすば何程でも與つて酬いをしてたければ其も
思たばうりにて及むを、過る日和尙より恵まれし金も残り無くなる

頃やうやく少しく快くなりしが、扱いよく治りて力も何やら出で、
病中の禮云ふ頃には宿錢食料の借り越しころあれ酒一杯買ひて頼ふ
ことさへあらば、身のやりどころもまた困りて馴染になりしを幸
ひ我身と何よありと口入しては下さらぬ、實は望みあめて九州に
行きたくともへと路用もあれば、腕も覺れた薬のあつて歩行さ
ながら飯の食へるといふでもなく、少時御世話にありし御禮の仕様
も宿料飯代御立替置き下さつたを御返し申しやうも無い仕置、仔細
あつて故郷へと死んでも金の才覺おと頼み難いなれを、耻を捨て御
頼と申します、假令バ土方日備なりとも厭ひませぬ是非一ツ
御骨折をと頼めば、亭主笑ひながら、分つた分つた左様氣を小さく
持つものではない、少時此所お居やうといふさう随分世話の仕様の
あり、去年も一人丁度汝のやうな男が我お相談かけたを私の智慧で

俄八卦見にしてやり、此春の一人按摩よしてやつた、汝の齡での夫等は出来せ、唯の奉公でもよければ直のことだが丁稚奉公今更望みでもあるまい、れ俊といふ情婦までこしうへた立派な男なれば、イヤ顔の色を變へるさ、熱に浮されて汝自分で口走つたよ、餘計なことい措置き丁稚同様でも汝承知なれをさしづめ算盤屋お心當りのあるが何と轆轤手にして少時日を送つては見ぬうと云これ、其返事よりこれ俊といふこと云ひ出されしお心をどくれぬ、

第五十三

古朋輩たづねし男を新しき友よ

心散亂しては何事も出来ぬもの、彦右衛門の俊に罪を作らせられてより我が我にあらぬやうなりて一時に八方へ念慮の駒走せ、六窓庵裏の一獼猴と情緒みだれ騒ぎ、夢路と辿りて飄然と廣島まで來しが病氣の擧句よ仕方あしの算盤屋奉公、黄楊柁の木を轆轤よかけて

は削り圓め、朝夕同やうなる事ばかり、れもしろからぬは知れたことなれと漸く是に身も定り心も沈まりて、五日十日と過し、主人にも馴染み、朋輩も親しくあるに連れ、次第々々夢の醒め行き霧の晴れ渡るごとく、平常心に立ち歸ればまよなく歴然と己が罪を悟り、何にかして其罪はろぼしたいとれもふ外よ念もなし、されども九州にわたりて惣五が話しにきしし池月といふ島見さく、また懐かしう頼母しうれもはるゝ惣五にも逢ひて此身の行末頼またく、到底此論まで文字さへ知らぬ我が巧に綺麗に樂して世を経身を立てること覺束なければ、稟て生れし筋力を使ひ腕を使ひ、土方あり漁師なり何でも其様な働さして一生を過すべき願望、今のまゝ此所に居れば算盤につもつても知れぬ末始終、いつそ幾錢か濟ぬことなれと他日返すと極めて攫み出し、それを路用に肥前へ行かむかとも考ふることな

編後りと なさ い

きにあふねぞ、道理に外れたこと、最早忘れても爲まじと立てし誓ひを破ることの厭にて、是非なく詰らぬ日を送れば、樹の葉黄ばと落ちて人の吐く氣息白う見ゆる冬の景色悲しく、牡蠣船大坂に下る時節も通り越し、月日と霜の融くるより早く過るにつくぐ安堵ぬ心から身を悶ゆる折節、此家の女房が所用ありて竹川小路の實家へ行く供を吩咐り、小包持つて随ひ歩く塚本町通り、前面より來し十八九の威勢よき若者が一禮して笑を作り、久しく御無沙汰いたしましゝが旦那様始め皆様は變はりもござりませぬかと慰懃と云へば、女房も笑つくりながら此方も一同無事で居るが汝の方も息災か、閑を時はちと遊びに來るがよい、然し家で外へは出たがらぬかホ、随分女房と可愛がつてやるがよいぞと心易い挨拶ふり、からかはれて顔と赤くし、いづれ近日うかいひまする、ね供の方御苦勞でござり

編後りと なさ い

まそると云ひ捨てに會釋して行き過ぐるに、彼の人ほど彦右衛門尋ねれば、彼は此春まで家に居た男であつたが觀音村の相應な財産家の娘に惚れられ、達てと望まれて嫁となり濟し今での舊の友達にも羨まれる身分、別に智恵のあるといふでとあけれど容貌あの位にて、汝に劣れと先づ柔和く色白で彼位美麗なる上實意深き心達、好い星の下に生れ合せしか案の外の幸福者、汝も男振り好ければ何時何のやうな女に惚られて好い運に逢ふか知れぬと嘲られ、思ひぬ女は大嫌でござりますると眞面目に返答してはつと心付き、小生等に惚れるやうな鄙しい女なふバ大嫌でござりますと云ひ直しける七八日過ぎて後銀次郎といふ彼男、何やふを手土産にもつて來り、主人夫婦と少時談話あどせし後、彦右衛門共に三人居たる男の中へ莞爾しながら入り來り、菓子ちと振舞ふて、様子知つされば手助け

あどしつゝ浮世雑談、調戯それたり翫ふれたりしても身を廉遜り愛
想よく談話に圭角たゞせねば誰も心かゝ此男を嫉とて翫りあどせ
ぬ様子、彦右衛門の舊くより知れるにあらねば會話の繼子になりて
自然手持なく唯切りに職業のまに精と出すにぞ、彼男氣の毒がつて
か色々の事あど問ひかけるに一つ答へ二つ答へ、聞かるゝまゝ差支
へあふぬさけと身の素性艱難のさまなど語り出して次第又打ち解け
諭も二つか三つの違ひに感情凡そ似れを耳かたぶけて彼男彦右衛門
が話しきつゝ其履歴よど感じける

第五十四 戀と遂げながら悲しき二人

話すよ連れて過來ま方と行末を思ひ出づれば、頼み少なく面白か
らき、詰りませぬこと云ひ出しました嗚呼役も立たぬ長話しと歎
息して彦右衛門口を嚙むを、銀次郎慰めて、また好いことも回つて

來ませうに左程氣を落させとものこと、人の身と誰まも語らば苦勞
のあるもの、小生とて云ふよ云はれぬ厭を譯の無いではなま、此家
に奉公して居つた時のとうが遙に好かつたと考ふる時もあります
あどと、座なりの言葉にしては眞摯すぎたる挨拶、傾て時移れば
又と暇乞を主人夫婦に、男等にも高ぶる會釋、殊更氣の合ふたも
のか彦右衛門まの左様ならといふも實意あり氣に、三日の月春戸の
方の柳の梢おかゝる頃歸宅ぬ、

銀次郎に苦勞のある筈、女房のね雛といふの今年まだ十七のねばこ
娘、何やう女房氣取りの態度と爲るもの、此の春までい世に在り
し父親に可愛がられ過して心と全然まだ小兒、甘へることゝ氣儘
るごと、何か意に叶はざる時早くも直に涙さしぐと泣き出すこと
ゝ戀かゝ持ちし我が男に耻かまながら詰る戯談な仕掛けの轉

編後りと なさ い

十四
がるほどお笑ひ巫山戯ることより外と知らぬやうの女にて、其等は
若いものゝ常と見て置けば別段何でも無いことながら、困るは我儘
の角取れせして動もすれば母の無理お堪忍せせ顔紅らめて云ひ合ひ
の末は耐へ情なく泣て騒ぐ婿あさ、それもまゝ母といふが普通のモ
のあら左程にはあるまゝだが、何がさて其母は五十の坂を越した身
で糠袋お蛇の服殻を入れて使ひもすべき厭味さつぷりの婆、所天の
没くなつてからに剃つて然るべき毛薄頭を厄介にして黒油こてく、
と、夢計りある鬢の残りも傅け、皺多き顔を異に光らせ、然も帯を
だらりと結び下げた態、見るから胸の悪くなる風情なるが上ふ、多
辯の舌先鋭いやうで氣味わるくべだつき、身のこなし妙お婀娜めり
しく、満々たる色氣胎の融けたやうお流るゝばかりの堪らぬ奴おて、
有らうことか言語同断、我が娘の戀ひ男に怪しからぬ眼つきを仕掛

編後りと なさ い

け、娘れ留守に依めもせぬ酒取り寄せ迷惑がる銀次郎お強て、昔時
何所でお覺えし不潔文句で飛んでもなぬこととはのめうしにかゝる
バ、素直な銀次も吃驚敗走、膝立て直して耻しめんかとも思ひしが
入聲の悲しさにうれも仕得で唯頭を下けたなりに無言ありしところ
へお雛が歸り來りしに一座しらけて三人とも口の無いものおなりし
が、其夜の徹宵出もせぬ咳排ひも未だ寐着ぬぞと云いぬばあり、夫
婦が語らひを婆め妨げしが、其後とね雛少しも油断せせ、自然と母
と他人あしらひおすれば、銀次も行儀をひとしは正しくし、苟且お
も打ち解けて話しあせねば、婆とそれよ里我が娘を嫁かあるんどの
やうお口汚く叱り罵り、少しでも夫婦仲好く談話なぞまて居るとお
ろを見れを忽ち、家の中で演劇ををるものは誰かと當てこそり、ね
雛が髪の亂れしを見ては何事に骨折して其不休裁にいなつたお嘲れ

バ、三度に一度は負けて居て、餘りた世話をお焼きあさるゝと早く
れ論が老りますると遣り返そにぞ、厭心持で耐らぬは銀次、折節
の下男は附附ても濟むべきを殊更婆ゆが、引き窓の車の工合悪くあ
ましが舞殿は算盤屋に居られまなまバ造作なく上手お治せるであら
う故一寸頼みませうかなと、舊の事云ひ出さるゝ男兒は身として
は痲癩が起りね雛が身になつては口惜涙のこぼるゝ時あり、父様の
居らるれば斯のあるまいにと女房泣けを、我の身の舊が舊故卿の肩
身狭うする、實家の立派であるからを斯はあるまいと銀次嘆くは
どよ、夫婦の中は愈々深くなり親子は間はずしく隔りけるが、猶
も悲しき何時の間やら食ひ物にするつもりで初かかかりし城
下の無頼漢に、婆の忍び合ひて村の者も一人二人の噂仕出すやうに
なりまことなり、

第五十五

考ふれば智慧は出るもの

彼よは困りやするといふが眼下の者の不始末よならば随分處置の仕
様はあるべし、世が逆まよて子へ意見すべきほどの智慧有てる齡
の眼上れ人の不体裁に、何とも手の付けやうさへ無くて困り入る
れ頂上あるべし、況して一段の氣の滅を始終持つ入舞の身とまての
云ふべきことも云ひかね、無理壓制せられざるべきことも無理壓
制せられ、口惜く悲まい思ひバかまする銀次郎、鯨鋒の勝と渾名あ
る無頼漢と腐れ合ひし母の不行跡を諫たさきは山々なれを扱むづか
し此口のさゝやう、直接に醜汚事を擧げて御謹慎なされませども
云ひ難く、影を論宏て實に省るところあらしむる諷諫とりの面倒
ぱうりで迂遠で其癖あまり利目の無いことをして見ても馬の耳で聞
れて念佛効なく、時に舞殿異きことと云ひるゝが云とるべきこと

わらば明々に云ふて貰ひましよ五ツを二ツと算盤の要るやうな談話
されても通りもので無い利口でない察しの悪い妾あつた十とと了ませ
ぬやせに十ならば最初から十と打ち出して話して下され、男が垣を
除たとか狗が潜り込むだどろの一体何の談話やら了りませねと、狗
が家へ這入れば如何するのう、何處の馬骨か知れぬものさへ随分家に
這入つて居るさうあと反對に捻られ、無念にはれもへど敵し難く
て口を閉ぢて仕舞ふ後は互ひにますく、隔心の募るばかり、婆と尙
更意地より勝が手へ惜氣もなく家の財と渡せば、ね雛も我が母
あがら愛想つき、如何か良人も舊は他人ありといへ妾に續きば母様
の生の子も同然、殊更今は家の主人あるよ其身代を瘦せさするよと
も關はせ、品行悪しきことよ浪費し玉ふ御心の中のさもしさと恨み
もし悲しみもし又憎くある事もあり、守護殿敷戸締め殿重にして兎

角は勝と婿曳からぬやう爲るが一手と何程注意怠らぬ細に眼を屈
かしても、護るものゝ間はあつた習ひ、其間と伺ふはどのことと殿子
の目を數み馴れた位の者の造作も無く出来る業なれば、婆の寐床あ
男の話し聲することゝ毎度にて、それと其時騒ぎたつるは論無けを
と左様しては家の名の汚れ近所への不面目、第一何程憎うても實の
母とれ雛の左様と爲かぬれば、其弱みは無頼漢が付け込みどころ、
萬一汝等が母親は我の隣同様、是からは随分ともよ夫婦揃つて男御
様を大切に爲やと尻引捲つて動乎と坐り込まれでもしては實お詮方
あき次第、されど此儘に母の不行跡募らしては大事と、思案あま
りし銀次郎が、何か好き分別と無きかと考ふる中、或時不圖氣のつ
きまど藏の中よ古金少しバウリを夫婦お隠して私と引き出えたる
婆、大方は勝に請求られて與らむためにか自己が手箱に匿し置ける

を見出し、扱も苦々しくおもふにつけ急に一策考へつき、女房に話
しめる間も無く、唯奮の御主人に頼まれて居し事もひ出しました
まゝ一寸行つて来ますと、母の斷り、小聲にてお雛には勝に來
れぬやう氣を注よと云ひ置きしまゝ城下に行き、日暮るゝ頃歸り
來りぬ。

第五十六 悪徒も知らぬが佛

善には勇まざとも惡を憎むよは強き人の心、銀次が困り入る一條聞
いて算盤屋が男ども皆其妻を憎み勝といふ無頼漢を罵り、手近さら
ば喧嘩ふつかけ袋叩きあして呉れたいと云ひぬをかりに年頭の榮吉
までが腕に力齧見せて力めば、年は二十五血氣盛んの政太郎といふ
之膝を進め、銀次上餘り汝は人が好過ぎて意地が足らぬ、論は無
こと此我ならば天秤棒押つ取つて勝といふ奴を敵き伏せるばかり、

何も此家まで来て泣言いふに當らぬと銀次の意氣地なさを齒痒が
る傍ら、自分の身に思ひ當ることあつてつくつく女といふもの嫌
ひなる彦右衛門は、足腰のさぬはど其無頼漢を我等も擲つてや
たいとおもひますると云ふほど、銀次喜びながら、扱それを皆様に
頼みに今日來た譯、然し唯打擲いたばりまでと後が面倒、其所と
氣遣へばこそ實の憎うてくならぬ奴をも今迄は免して置ぬたなれ、
かねて我も如何あかして眼の中は芥のやうな奴追拂つて仕舞ひたく
の考へまが好い方の無くて手も下し得ざりしに今日は天の與への好
都合、仔細といふは今夜大方勝めが忍んで家の先代より傳はりあ
る古金を貰ふて歸る筈、其所を待受けて皆様達に充分懲まめていた
いきたく、我等の内より盜賊呼はりいたせば、懷中に我等が家物
はあり、何と彼奴が云ひあふそうたどて盜賊とあつて終ふの必定、

まゝ婆様もまさかには否それは我が情夫ぢや其金の我が遣つたのぢや
とも云われぬまれば論と無く奇麗に濟むといふもの、夜更に我等
方の近所に忍んで居て下されとは些申し憎む願ひあれど友達甲斐に
我等夫婦助けるとかもふて待伏して下さるぬか、事済んで後は酒
も買ひまじし御禮も出来るだけはいたませう、然し仔細なく皆様
達が余り近うもない我等宅の近邊うろついて居られしとあつてと左
もく相談し合ふてあつたやうにて妙あらねば、何か旦那様より急
る用事でも我にあつて手紙お持て来られやうに表面ををし、偶
然家近くありしとき盗賊と呼びきて逃げ出る曲者を、友達の家より
出し奴用捨ならせと取り押へた風願ひます、左すれば皆様も頼ま
れたやうみ見ぬす我も頼んだやうみ見ぬす、何事も自然で婿の明い
たやうあり、何處へも疵のつかず疑ひも残らで濟む譯と語れば、各

自手を拍つて天晴穏和い人だけ考慮が細いは感心々々、よし／＼面
白いは是非とも今夜我の出掛けて行つて相圖次第勝とぬふ奴たゝいて
呉れむと威張るは日頃力自慢の政太郎、齡が齡だけ實地頼まるゝと
なつて二の足踏む分別顔、煙草ばく／＼黙つて居る榮吉、一も二も
なく政に同意する彦右衛門は無分別の上かゝること面白がる年恰好
殊更身体は最早大人だけあり力も人並勝れたるなり、此二人心得た
と力むに、勝といふの度胸こそ好けを敏捷に奴でころわれ小男よし
て大力でもあければ充分と喜ぶ銀次郎、さらば夜半よ我等が家の横
手れ笹籬れ低いところ乗り越ゆるか其籬の外れの榎樹の傍より勝め
が出づべき故、桐の樹など立ちし中よ松の高きありて其下に稻荷の
小祠ある邊りよ忍んで居て下されと示し合せ歸りける後、榮吉を腹
の中で嘲りながら政太郎彦右衛門主人が家を立出けり。

悪徒も知らぬが佛、飽迄若夫婦を馬鹿にえて、可厭ながら金取るために婆とたらし、今宵も豫て無心し置きしだけ取らむが爲の忍び合ひ、たもひしより多くの古金得て喜びに氣も急ぎ、早くも歸らむと脊戸より身を脱し、今しも例の通り笹籠跳を越むとする時、待ち設けたる銀次雨戸がらりと引き明くれば燈の光り闇を破りて遙に身を射り、盗賊めと叫ぶるゝ一聲に思を逃れ逃げ走りぬ。

第五十七 人を殺す所を見て居られし歎お星様

數蚊に食はるゝを耐へながら手頃の棒と右の手に持ち、今や來ると待ち構へたる政太郎彦右衛門、來たらば免さじ、散々に打つて伏せて足腰の骨も筋も蒟蒻のやうな柔らみある程打りて呉れんと血氣に逸さば、若し同士謀し合せて片唾を呑み今か今かと野良犬でも撲つ氣おなつて待つ折しも、盗賊めと一聲呼ばれて吃驚し、無二無三に

逃げ出せし勝、また後方より盗賊と叫ぶるゝに膽縮み、暗いこと身よ覺ぬあれを一生懸命駆け走る横合より、そりやこそと跳り出たる政太郎、盗賊めと罵りながら三尺餘の生木の棒を向脇拂へば後より飛んで掛りし彦右衛門、倒さかゝる勝が横面を棒も折れよと無言で擲く其間にまた一つ政太郎が食とするとき流石と悪徒の度胸と定ること早く、汝等は人よ頼まれたか、打つなら勝手に打つて見よ打たれて羨む我でい無いは、さあ打て打てと突立つ勢、それに呑まれて少しは小氣味わるさに初めの意氣込抜けたる政太郎、流石も後へ引きかねて、何吐す盗賊めと打ち下す棒端といかず地をたたく此時遅く彼時早く手元お付け入る鯨鋒の勝、喧嘩お覺あきば身このし疾く、突然政太郎が有ちし棒を奪へを奪とれて取まかへさんと揉み合ふ途端、彦右衛門は充分勝が肩先たゞく、勝は政太郎が下

腹と蹴る、意地の無ければ度を失つて逃げ足いぶす政太郎に關はず
汝小癩さど彦右衛門と打つ、打たせて勃然と怒りを起せし彦右衛門、
今は我を忘れ打さるゝも關はず負じ根性飽まで募れば必死となつて
打ち合ふところへ六尺棒もつて出来りし銀次郎、憎さも憎しと勝が
背中を力一杯に撞けば踏躰さかゝる其所を思ひ知れど彦右衛門が横
あぐり、急所ああたつて動と例るゝところを口惜しまざれに二人し
て滅多擲りお打りさつてつ、遂に息を止めけるが、殺さんどまで
はおもひざりし銀次郎彦右衛門、悪徒とは云へ盗賊の證據ありとの
云へ勝手に殺せし罪の免れせ、今更二人顔見合する時天空おの燦た
る星の影、ゆらめく光りの物凄く、風さへ急に海寒し。
到底此儘よの置き難けれと高が打つて殺せしさを活といふこと知
つて居ら心造作かく活すことも出来べけれど、それの知らせ他にそ

頼み難え、水ありと注ぎ懸るより外あるし萬一燕生さずバ仕方あり
言なく此段お上へ申しあぐる分の事との彦右衛門が言葉に銀次郎同
意し、まづ懐中より金取り返し、溝水掬んで澆ぎのけ無暗に身体を
蹴散まけるが、水の通じしか蹴所の下かどしう畔と一聲息ふさるへ
せば占たといふまゝ左右お別れ後も見ずして逃げ出しぬ、可憐銀次
の其夜眠られざりしなるべま

第五十八 幾度か拜まれぬ

彦右衛門主家に歸りて雨戸をどくと敲けば内より誰うと云ふ聲は
政太郎、彦ちやと答ふるに漸く押へて居たらしき戸を明けて早く這
入れ後を確と閉よと云ふ言葉お慄への氣味あり、頓て汝は彼時から
如何したと問とれて、此臆病者め我が鯨鋒めを撲ち殺したと語り
聞おして驚らし呉れむとはねもひしが、いや〜其様なこと云ふて

も詮なし都ての包む如じと、我等も彼時より長居の無益と相手に
ならず歸つて來しが、彼程も仕てやつたれば勝といふ奴も随分骨身
にあたへしあるべし、殊更汝が最初に一と擲り向ひ臆排ひしは彼
奴も餘程ひるむだであらうが動と倒れし彼時の氣味のよさと相手
花を持たすれば、急よ勢の出る政太郎、多分は奴も當分歩けまい、
何よせよ此事の口外互無用ぢやぞ、悪徒といふものゝ親分もあ
り兄弟分もあるものあれば二人が敵と眼ざれ復讐などさるゝやう
なことあつて人の荷と我が負ふやうな白痴とある道理、黙つて居
よ手拵話しそるなと諭さけよ分別あるふしく説くも底にの恐慌のわ
ればなるべし。左様ぢや左様ぢや此事知つたは榮吉殿ばかりあるの
榮吉殿が饒舌つてさへ呉れれば銀次郎さまの饒舌らるゝ筈は無しと
小聲お云ふ顔つくくぐ、眺め、耳よかすり傷首筋にの打ち疵、彦右衛

門汝は大分痛い目に逢ふな、成可く明日からは店頭などお居て人
に怪まれぬやう心掛よと云はれて氣の付く所々の疵、傷とは左程あ
らねど大分癢あり擦り刺さわり、餘り寝めたことでない業とせしと
少しと悔む心も起りしが其夜之事無く眠りけり。
明る日の晝頃屈竟の男引き連を銀次郎と入り來り、主人お一應こと
わり云ふて二人を誘ひ出さ、まづ昨晚の禮かゝ始めて怪我なりと
か、人に怪しめふとせざりしか、主家で何とか云とござりしか、
歸路にて子細なかりしか、後お残りし榮吉の、親切よ起きて居て呉
れしかなと問ひ尋しが別條あきに胸撫で下ろし、酒肴よ充分勞を憐
ひ僅少なれども我が志し、一体ならば失禮かと知らねと他に仕様知
らねば免して取つて置いて下さると若干の金包み、一應二應、こ
んちもの貰とうとて爲たことでとあしと政太郎辭みしが強られて是

非あく受け納むまば、彦右衛門も其にならつて受けとりぬ、是で勝
が復讐の無くば随分骨折甲斐とあること、尙此御恩と長く忘ませ
ぬと銀次郎も幾度か拜まき有難がらまぬ

第五十九

無筆の悲しさ復知りぬ

寐つゝのれぬ床の中、ゆくゆく考ふれば京都とひひ廣島といひ不思議
にも女と悪もの、銀次郎も可憫や母のためは随分苦しきもし悶
もしたるむと、我がお俊のさめ誤るましよ引き較べて察しやる彦右
衛門、それおしても鯨鋒の勝るま、渾名あるほどのものが、彼儘よ
ては体むまじ、必然身体の痛みも去り元氣の舊に復りま、曉は復讐の
一幕、大胡坐の唧へ煙管とひひ形で銀治郎も還るり、たゞしは同類
ひきつきての喧嘩しかけと出掛て来るかあるべま、我も政太郎も彼
様根性の剛く頑固奴とははれもはで面白半分お打ち擲さしが、中々の

悪徒なればいよく向ふへ廻しては扱ひ難い事なり、餘計な手出し
て今更逃ぐるも卑怯なれど我の何も深く銀次に恩を負ふて居るとい
ふでもなし、また長く此地は此足といひめて廣島のもれとなるべた望
みもあるまあらねば一生懸命になつて他の事に肩入るまも悪な譯、
九州に行つたどて別に確とした的のあるまあけま、頼りよして
纏りつかば惣五殿のよもや我は知らぬと音無く勿ね退けもなさるま
い、到底ぐれたる一生何など爲らば爲れ、れもふやうに身を持つべ
ま誰よか憚らむ、幸ひ此所も少まばかりあれま目ざす池月に行くま
と充分ある金あり、銀次郎か貫ひし此金を旅費に彼地へ渡るが何
よりの好い思案、身を寄するま屈強のところと廣島が極つたでもな
し、いざ行かん筑紫れ果の離れ小島、苦屋の風情浦回の月故郷のお
もかげも忍ばれて妙なるべし、つまらぬことに關りて地獄にもつか

編後りとなさひ

す極樂にもつらぞと云ふやうな此様を土地に長く停まるべき事かと
と心と定め、逃出するは最早馴れたれば緩々と手扱なく仕度と一の
へ、奥の行燈暗して夜半の鐘鳴り、政太郎が高野聲古びたる大津壁
お浸ミ込むやうな寂靜なる折節、雨戸ろつと明けて外に出れば、霜
よ冴わたる天高く袖吹き返す風ひややかに、蚯蚓の吟むる聲清き、
何程突然も行けばとて病氣の時に思ふなりし木賃宿の亭主に一應の
禮謝せでの人らまかすかもしもいれても云譯なし、といふて此夜中お
敲き起さむも氣の毒なる上第一我が素振見てとつて世話甲斐あしと
恨ともすべし加ふる、時筆もつことと知つたる人れ羨ましく、我我
箇かの字と知らば書置きすべきよ口惜と又もや井桁屋立出し時の通
り無筆と悲みしが、よし〜仕様ありと迂路して彼宿の邊に來れば、
黒める屋根の寂しげにたちて、引しめある戸から燈光も洩さず、油

編後りとなさひ

を惜みて寐際よ消すが習慣の彼亭主、大した善人といふでも無けれ
ど相應お浮世を清く渡る人の今頃は罪の無い夢でも見て居るうと憶
ひやるよも一目逢つて禮云ひたさの山々、然し左様していと懐中探
り、取り出す金の少けれど買ひ薬やら飯代やら先頃世話にありし借
の分だけ除いて尙餘りは聊あの禮謝心、彦右衛門が爲たことと知れ
いではとれもへば、亭主の見知つたる古手拭にそれをつみ、他人
に取ふるればそきまでと齧蝕竹あらべる窓のところは抉え置き、心
の中お恩と謝せしまゝ引つ返して小屋橋川田橋、松原ぬけて段々と
月没る方の西へ西へ。下の關よと小倉へ渡り、山鹿宗像箱崎松原、
敵國降伏れ御筆を無筆ながら拜みたてまつり、博多柳町も餘所限に
過し福岡姪が濱今宿深江、肥前に入りて名古屋より平戸に便船あり
と聞き、唐津から波戸浦へと志し、首尾よく船を得て壹岐への十五

里平戸への十八里の其所より浪枕の夢の見初め、烈しき地方風も
沖風にも運よく逢はず右に大島左に青島、越えて雷は瀬も無難に平
戸へこそ着よけれ

第六十 始めて見たる生月島

耳よと豫て入るなご眼よの嘗て入れざりし生月島へ小船は便り得
て渡れば、廣島在の銀次が何となりしか勝が如何したらんとも更
想ひ出さず、薄情のやうなれど若いものど餘計過ぎ去つたことに頓
着せざるが常、くよくよ物思ひするは却つて本来にあらざるな
れを、彦右衛門いろいと船乗り捨て、御崎の浦と沙路辿りて尋ね
行き、惣五さまはと問ふて逢ふて而して我が身の上話してよいとこ
ろだけは明しなる後扱我を如何なる場となりとも其人の親切を頼り
よ候てもふひたき所存、やうやく大納屋のはどりに来るに前と近く

海を扣へて表間口七間奥行は十二間の瓦屋立ち、又其奥にも相似た
る倉はあれど、時しも十月の中頃漁獵の休止の中なれば寂寞とえて
人影なきよ茫然とえて、辛くも向ふより来る一人の男を見つけしよ
よ走り寄つて御崎の大納屋とは是でござりまするか指さし問へば、
稍寒き空にも姿を裾高々とまくり上げて赤黒き脰をあらはせる男不審
さうよ彦右衛門の頭上から足まで見下し、大納屋とは是だが汝は城
下のものか、何しに何を尋ると銅鑼聲無遠慮な物云振り、いや城下
のものではあし仔細あつて惣五郎様といふ仁よ逢ひたくわさく、此
所までまゐりましよといへば、帯のやうな眉皺めて、今は此所に住
ふて居るもの鮮し、皆一部浦に居ることを汝は知らぬか、殊に惣五
殿は居るか居ぬか、よくは知らぬと譯ありて生れ故郷に歸らるゝと
やらで、昨晚が別れの大酒宴、今日はまた羽指連中が別を送る筈、

編後りと なさ い

逢ひさくば彼方へ行くべし斯くくのところと教へらましましに踵
を反して、松富の宅に至れば、見るのらが廣大なる構へ、それも其
の筈是こそ親方が家なれば。京都より歸りて後は八坂東山の景色眼
の底にといまり、年老し父母が衰へたる姿、霞に鎖らまざる如く隙
腫たる眼、やゝ遠くなりし耳、達者とは云へ腰もろいより齒も疎に
ならまじし様子、それやこまの思ひ出さきての遠く離れ居ることの
我さへ心よかりまして父母の嘘や雨に風に心細くおもひ玉ふらむ、
不孝は最早充分爲たり此上は及ぶだけの孝行して責めては往時御苦
勞のけし罪をつぐあふべし、朝あ夕に三汁五菜の膳をすゝむること
は出来ずとも御膝下よあつて出来るだけの孝養つくすべきが當然な
るよ、營業とはいへ何事のありふりとして音信さへ一月もかゝるほど
隔絶り居る筑紫の果に居らむことの悲しく、随分意地強りし男も

編後りと なさ い

齡が持たせる分別に我が折れて、人の見ぬ部屋の中には涙脆く、京
都を出る時は眞は氣休ばかりに追付歸宅ませうと父母よ云ひしが生
月よ歸つて見れば眞底から歸宅たくあま、遂に其趣き松富に申出せ
しに、親を養ふといふことなれば強てども止め難く、却つて其心根
を察すれば可愛いとところのあるあ、今迄の功勞もたまへば、當人れ
思ふところを壓へることも氣の毒と機嫌好く承知したれを、扱ころ
昨日今日の酒宴さへ主人が家にてとるものなるなりけれ、惣五もど
より調子よく人を酷く扱はで身を苦しませることを厭はず、上に
も下あもよきものなれを、馴染る人の少からせ、今日の別れの酒宴
の席にも羽指ばかりで三十人、残らず揃ふて今まさに、酒も漸く中
のところへ何も知らねば彦右衛門尋ねいたり、引かるとまゝ座敷
に入りぬ

第六十一 へそのへねば好いのよ
見たところ此地の者で無さう若い男が惣五殿に是非御眼にか
りたいと申しますると小僧の取り次ぐお、誰とも考はつゝのさきと
少しの酔ふたれば何の思慮なく、大方誰か別来たであらう別
に遠慮は無い一寸此所へ連れ来よといへば、小僧走り出で御關ひさ
く此方へと引く、引られて洗足すまし塵打ち拂ひし彦右衛門、憶せ
ぬ突つと通る腹の中では、何から先へ云ひ出して好いやらと迷ひさか
ども、顔見合す途端に、やあ汝は彦で無いかと聲かけらるれば、
胸算用の暇なく、惣五様まこと久潤、お變りも無うてといふより
他なく、見れば粗造おして大きな座敷の中車座に居並びさる荒男
ども、いづれも色は真黒々で光るは眼をのり、大髯の大男どろひ、
捲り手して飲むあり片肌ぬぎて大胡座、さも夏らしく此時候を馬鹿

にしたるもあり、うきらが一齊にぎろりとしたる眼をろゝいで今惣
五の横手より少し引き退つて坐したる我を視るに、見られて何となく
蚊細くとあらぬ身ながさ比較べては我が身躰つきの立派あらぬが耻
のしぬやうお心地もしたるが、驚いたる顔付して惣五が。まあ彦右
衛門何して汝と此様どころへ来た一圓合點が行ぬわい、我が親か
さんぞなら鬼界が島へ尋ねて来らきたとて吃驚もせぬなれど五日か
十日の馴染を便りお假令バ我が汝をバ可愛がつたにせよ能く尋ねて
来たの、但しは我を的よ尋ねたでと無くて何かの譯で自然平戸かな
んぞへ来た序お尋ねて来て呉さのか、それよしても大柄とはいへ
齡も十七か八だときいたよ能く見ず知らずの九州まで、百里の上も
京都からの離れたところまで能く来たの、連があつたの無かつたか、
一体柳の辻の如何したれかと問はるゝを機會よ、道連はござりませ

あんだ、他を的に来たでもござりませぬ、唯御前様を便つてまゐり
ました、仔細あつて井栢屋様も居ること、兼故手早く申さば逃げて出
して参りました。ナニ逃げて来たか、我が親父の佐十郎様にもこと
わり云はいでる。唯逃るほどの事故御ことわりも勿論いたしかねま
した、字が書ける手をもたば書置といふところでもござりましたが
其様な器用あことも出来ませぬ、唯ついで出てまゐりました、旅費
も無ければ腕に職も持たず、途中の随分苦しみました、御察しなさ
れて下されまじと云ひ了つて不圖仰ぎ見るに例のたくましい顔つき
今ひとし遅しくおぼせられて、惣五が我を見つゝる眼は常よりハ
圓に輝き。やい彦め、汝は扱の小癩にも悪いこと働いたなと頭上へ
落ちかゝるやうに問ひのけられ、ハツと満身汗よじみ出で、情あ
や此所迄来る幾夜の寐際に斯う問るまば斯く答む左様さかれたら何

様返事せむと考へためて来し彼一條を恐るまゝの見透さまで智慧
かしく巧み置きし其巧一切無益ありしと思はず知らず慄然
として返辭は山ざりしが、急に調子をかへてアハ、と笑ひ、彦よ
心配すな悪いこと爲さら爲たでよし、關ふもの、汝は氣性も大抵
呑み込むで居る、我を便つて来たといふだけ我おは面白いら何
様よあして遣らう、びりくするあ、偷盗と密男とさへ爲たので無
けはば關ふものか關ふもの、蟲がある人間ぢやもの悪ひ事ぐらゐ
爲ないで五十六才まで生きて居らるゝものか、皆の衆あんと左様で
ハ無いかと云へば惣五が向ふ座も居る四十恰好の男、小鼻は怒つて
頬骨の横廣な厚唇の鈴眼といふ無法な強さうあ奴が真から可笑げよ
飲みかけた酒を霧と噴き出し、フ、御酒は加減で常時よりとあふ
い事を惣五が云ふあ、何のく偷盗もよいのよ、密夫もよいのよ、

たい擲り合つて負けて流涙面になりさへせねばよいのよ、若いの汝の頼母しい身体をして居るが未だ骨が鯨舌のやうに弱いであらう、膽玉の如何だる辣當ぐらゐるかのと、失禮極まることを云ひかけてそれを一座の興に、皆々一時あせつと笑ひぬ

第六十二 眼角計りで用を足と船の上

虎の群羊の入しごとく多勢の中に彦右衛門一人心細く、無禮な云ひ草やり返してやらむといふもへども懼つて穩しく爲て居れば、惣五と笑ひながら振り顧り、彦よ驚くな生月の風大体此様なものなり、汝の身と如何にかしてやきば安心して最早其事は氣よかけるな、綴まど此席に遊び居て手近なところの酌でも爲よとの一言、如何にかして呉るよといはきて重荷卸した心地、さりながら偶然云ひ出した言葉なるべけきと惣五が盜賊と何とやらさへ爲ねばよいといふたる

が今更氣よなつて人知を畏怖を抱くも自然の道理、あざむけぬ人の本来なるべし。有難うおざりまするを幾度う云ふて命令通り其所等の男たちよ酌なぞするよ、先刻我をのふかふたる厚唇の男が、惣五一体其若いのと汝が何かと問ふ。問はきて惣五が聞てくき權左衛門、此若いのは我の何よもわたるでいなければ、これくの譯でと京都の四ツ塚外れて惣五が親の佐十郎が初めて逢ひし時の仔細語れば、權左衛門にやゝ笑ひあがら。分つたゝ、而して惣五汝は是か引き違へて京都へ歸る身、受合ひ込んだ此若いのを如何するつもりか、若いの汝は下田育ちといふらば浪あうねる船の上歩るけぬといふはさでもあるまゝに、腰拔な役廻り望まら仕方なけきと左無くバ我の下おつけて加子よしてやらうとねもふがと云ひ出す傍から。權左衛門待つた、惣五殿の今の話しきいて此若いれは我が欲しくな

つた、汝の荒氣過ぎて何程の確とした奴よせよ新來のものぞ汝の
得使これぬは、惣五殿もう頼て組仕出しの祝ひもある頃、我が彦を
バ預つて遣ると親切氣に云ふ男を彦右衛門見れば同じやうな荒男な
が、兩鬢の毛の渦の如く縮れて顔も幾許の柔和なれば、同じことな
ら最初我を騙つたる權左衛門お使はれいで此男の下あつかひと思ふ
折しも、惣五が返辞もせぬに肩高くして權左衛門。要らざる世話を
富藏云ふな、我が荒氣あら汝は弱氣で若いものゝ爲よとあらぬと、
第一我に得使これぬほどれものなら浪の中は蹴込むで仕舞ふたとて
惜くと無い、口で言ひふてかゝ用の足りるやうな迂闊いことでは役
よたゝぬ、眼角一ツで思ふ通りに加子ひつ使ふ此我に使ひ込いで
生月よ來た甲斐があるかヤイ若いもの、富藏などの手につくな、身体
に軸があらば怖いよとを怖がるな、左程怖いものがあるものか、風

帆船の炊事人を見ても知れたこと、海の中へ擲き込まれる、位と商
賣船でも有と勝ちや、何のどうせ陸に居る奴等のやうに長閑よ一生
暮らす譯は行かねば到底の事に思ひ切つて苦め、水の上では好いの
悪いの苦ぢや樂ぢやといふ言葉がある譯れものではない、關ふよと
でない危険くて苦しくて仕方無いものだと極めて仕舞つて己の
手につけ、厭か、弱蟲めと傍若無人の無理談義、惣五腹の中では三
船番の富藏よつけてやりたけれども云ひかゝつては譲らざる權左衛
門が氣風を呑と込み居るば、何とも仕方なく黙つて居る時、富藏小
聲に耳につめて彼若ぬのが權左衛門の下については可愛想されば惣
五殿おもひきつて辭ひでやりなさき我が代つて引き受けてやらひと
いふ言葉、心配氣よつ居たる彦右衛門が耳に入るが否や、何と
もひさだめしか彦右衛門つと立つて權左衛門が前よ行き。親父殿頼

very good

む、我は親父が下につきたい、どうせ無茶苦茶の此身体如何になど引使つて貰ひましよと云ひ出しける

第六十三 船權握つて無事に世をわたりぬ

いさぎよく思ひきる時人の根性の何れ位るといふことの見ゆるものあり、假令ば往來に落ちぬるもれを見て一人のねもひきりて懐中に捻ぢ込一人の足先で蹴返して行く類、何でもなれことやうなれど其所に人品の高下もあらわれ、行く末の運も大抵知るゝごとし、穩和き人を頼むのとれもひの外は彦右衛門の富藏おは付のいで荒氣の権左衛門につきしがば、惣五さへ何方へとも扱ひうねたる折節此分別に驚んで彦右衛門が顔見詰るのみあり、ろきに引き換へ権左衛門はまたくと笑つて得意らしく惣五にむかひ、當人かくいふ上は惣五も富藏も異存のあるまい、我が以後の確と引き受けて厭でも立

派な好漢よしてやる、惣五も安心して京都へ歸れ、彦、汝も何いふ了見う知らぬと我よついで上の半熟な根性もつて居ていなふぬぞ、随分酷い目よも逢はずど其怖れての役たぬぞ、一杯與てやる是飲めと献す酒盃、頼むだ上の此身が如何ともなふなれ怖いこと厭ふやうな鄙劣な根性の持ちませぬ、頂戴さまと一盃引き受け満々と飲んで返す、是よて悉皆埒の明き一座のそきより復初めよりへりて賑やうよ、談話の途切を彼方でも此方でも、惣五よ京都へ返つて父母の傍は朝夕居るゝが嬉しうるべしといふの眞面目な男、過般歸京つた時可愛奴でも出来て其を女房よまたさよ歸るでいないう畜生めと馴るゝ洒落な奴、京都を我のまだ見ぬが滅法女は好ところぢやさうな、歸る次手よ此眼は左に方だけ持つて行てもういたいといふ奴の下ふぬ男、人さまぐのものがさうりや喧然と騒がしき末は猪

口飛び唾珠舞ひ、風波叱咤とるやうな聲つき可笑く歌ふもあり、砂鉢たゝいて拍子どるもあり、流石に羽指共のあつまり亂暴の酒宴なりける

来る幾日いよく惣五出立ときまりて、故郷へ錦といふはとに之あらねど相應ふ金も持ち松富のらも長らく實体働いたる褒美いくらか貰い、中間から餞別も日頃美しう交際たるだけに多く受けて、惜まるゝ別れ際、鬼のやうなもれ同士ながら漕ぎ退く船を渚に立つて見送る多勢見送ふるゝ一人、たがひも見ねるやあるまで心の中やさしき情はこもるべし、よして此人を的にはるぐ尋ね来て身の落着も此人の餘光ありて極つたる彦右衛門にとつて、馴染は浅いなगरも兄のなんどのやうなものはれて、皆人其處を去りし後も尙佇みて、見送りけるが、是より彦右衛門が身は眞實職業ある身体となりつ其

歳の小寒過ぎ、權左衛門が船の水子の一人となりて御崎へ廻りに漕ぎ出せしが抑々の始り、魚見臺の旗の使ひやう、一番二番三番船の指揮の旗、船印の烈風と號んでひるがへり大濤の船縁と怒つて衝突る様も漸くは見つ覺えつ、さばき髪虚空と涙だゝせながら鉦をどつて打ち込む身構へ、幾尋の綱もつて座頭といはせ背美といはせ其腹の下くいる必死の業も眼に馴れて一年二年三年と過し、危き目には逢ひながら無事に浮き世をとりける。

第六十四 其時はまゝ舟端と突立つて

男は二十五が厄年、恰血氣充盈て物事爲過すべき頃あまば、過失も自然あり勝、兎角世波に蹙躓きやすきものなるあ、彦右衛門何の病も受け老不幸おも遭はせ、別段の失し物さへせせよ其年を送りしが、明けて二十六の年、頼とよ思ふたる權左衛門が痛風といふ難

編後りと なさ い

治の疾にうゝり、殊更多年荒業も身を揉と、寒熱に無理堪へせし身
体だけに其症重ければ、他の者は左程お思はざるも自己は萬事其人
の世話を蒙り且は日頃可愛がられし恩義もあり旁々、我を無いもの
にしてれ看病、半身不随意ななりし大の男の扱ひ難きを甲斐々々し
く介抱して、妻子はわらざる權左衛門が朝夕の賄ひより藥劑の煎じ
方まで一人の僕相手に露厭ふ色なく處置をれば、床よりわたりても精
神確乎なる權左衛門、流石も鬼のやうな暴い氣性さへ親切に浸み透
されて情も脆く、若いものゝ身には辛あるべき病人いなり、第一我
ならずば半日も辛防なるまじきを能くも彦右衛門の物ぐさく汚氣なる
をも嫌ふ容態なく看護りて呉るゝことよ、眼をかけたる男共も多け
れど大抵の自分等が仕事あるに托付けて、見舞すら義理のみも形式
ばかり顔を持って來る中よ、少しの普通の外に眼をかけて遣りさせば

編後りと なさ い

とて、上を鯨もゐる時節に、自ら乞ふて快き組出の人数に加はら
快き沖にも出せ、面白くもなき我が傍を離れざる心底、我今まで人
の情を有り難く覺ゆしこと無く、唯我意一方よ世を渡りしが今年初
めて病といふもれゝ味知り今年初めて人れ情を有り難く覺ゆたると、
つくぐ和しき彦右衛門が舉動も感じて、涙こそ見せぬ腹の底で
嬉し泣きよ泣けば、彦右衛門の又、我が廣島の町外きよ倒れゝま
し時の事、木賃宿の主人が慈悲も心細くも絶えて絶なんとする玉の
緒を繋ぎとめたる事なぞ、そゝろよ思ひ起して、我が往時よ他の今
を推し較べ、無事壯健よて鐘の鳴るよ似た聲で談話せらるゝ如き中
こそ親父親父と珍重して要なき者まで近寄り來れ、威勢の力と共に
援けて世よ頼まなくなると直よ、小魚一匹持つて來る男さへ少
きやうよなる仕合せ、其あさましさが憎むと同時に、我が親父が思

いむところも忍ばれて、意地よも續く限り根限り枕元よ附き添ひ
でんと、一寸とも去らば世話焼けど、口惜や病勢の日増し重るる
と、重れば重るほど又見捨難く、願ふに神佛力を假し玉ひて再び舊
よ復たせたまへと念せる眞實は神佛よも通さるべきが、孤島の醫師の
場所柄だけよ外科よこそ馴れたき、技倆の覺束なき敷、權左衛門日
よ日よ弱き行きけるところへ、下を憐れむ心深き松富が隠居、富で驕
らざる木綿布子よ木綿羽織といふ姿で小男隨者よ杖つきながさ尋ね
來り、權左如何ぢや少しの快心よと飾り氣のなく淡泊と問へば、剛
氣の男起直して挨拶せんとするよも任せぬ身の口惜と焦立つ、其意
を曉つて扶け起さんとする彦右衛門。ア、構ふなく我が來たとて
左様されての困る、其儘樂よ居よくと制するも慈悲なま。願て權
左衛門辛くも一禮して後、今までの強心御世話よなましましよ、此度

の病氣今でこそ未だ確乎なるやうなもの、大方往生安樂國でござり
ましよ、ハ、ハ、ハ、それも定命をまや風が吹ぬよほどにも思ひませぬ、
地獄も極樂も無なものよと決定て居りますし、後へ殘し女房子も持
さぬ中々氣樂で何時臨終が通つたとして微懼とも爲るでの御座りま
せぬが、扱氣の丈夫な中よ御來臨を幸ひ一ツ申て置きたぬは彼彦右
衛門めが事、初渡せれるもく、わが我が仕込ひで大分役よも立つや
うなましましたし、何事なくとも今年を役割をあふさめて羽指見習ひ
よして遣るべきでござりまするが、我が亡くなつた後何の我の代り
ぢやと心もふて御眼のけられてやつて下さりませ、随分力量も有る
眼晴も利き、根性も意地とあれど從順で良ぬ奴でござりまする、此
奴よ頼んで我が跡をあづらつて貰いたぬと山々でおざりませるし、
勢子どもよ此奴を慕ふて居りまするが、まさのよ一番の親父よと仕

編後りと なさ い

ても他が承知と爲ませぬ故、それほど無理の事を願ふでとあるし、我が亡くなつた、唯何卒御心長く此奴を見て遣つて下されと申すだけの事、實は可愛奴でござりませぬればと、少しと理も暗い節も交る繰言、聞て隠居と打笑ひ、大分味氣あることを云ふが、夫で治癒つゝ可笑あものであると云へば、權左衛門アハ、と笑ひ、其時はまた船端と突立つて脊美でも思ふさま叱つてやりましよ

第六十五

死での馬鹿よさるゝ者なり
無常の是常の事、生あれば死あるの定りきつた道理と、云へて夫迄の仔細なれど、昨日まで酒飲み交した男の其薄手の猪口より脆く壽命盡き、今朝がた談話爲逢た人の其聲さへ未だ耳を脱けぬと思ふ間、又往生寂滅、随分是れと驚くが無理よもあらせ。彦右衛門が杖とも柱ともせし權左衛門、さしも岩壘作りの壯健な身体なりしに、時

編後りと なさ い

間といふものゝ生命を奪はれて、盡せるだけの盡したる醫藥は手當も甲斐なく、臨終安らうならせ七頼八倒れ末、いざといふ間際も活と眼を視開きしが頓て静と閉ると共よぐつくり落入り、海とも山とも知れぬところへ一人旅、歎いても悲むでも追付くことよもあらせ呼び回せることよもあらねば、彦右衛門一旦の空と涙を澆ぎしが、思ひ返してそれくの始末取りうたづけ、松富が家うら遣さきし分別わり顔の年寄男と萬事相談して、野邊に送りも不束ならせ濟しけるが、それよ付けても觀せらるゝ人の腹の底、忙がしいといふ云へ、相應に權左衛門が力を假りたることの有る者すら葬式も顔も出さぬが多くつくつく思ふよ人の生て居る間ばかり、死んでの論も糸瓜もなく馬鹿よさるゝもの、何ぢや彼ぢやとて嘘つき同士の寄り合ひでこそ美しう保つたものなき、正直に受けて居れば土よなつてうら

好い阿房よさるべし氣息ある間にか互に爲にもなり合ひ戲談も爲わ
ふものゝ死んで力も言もなければ唯輕蔑され度外あしらわれ好
い馬鹿にさるゝのみ、さりとは薄腹の立つ人情、小賢しくも親父
顔して親切めうすうとおもへを其の自分を養ふため、隣人の手の醋
を與つて自分からでも與つたやうに恩のよしい舉動をなし、施せば
其報を待ち受けての濟して居るやうな男が好い人らしく思ひれて居
るものとの今まで知らざりしが、少しは人といふもれ頼もしく寛容
で實意あるものと思ひしは過誤々々、一時も頼まお仕難き他人な
り、詰るところ一身の外に全く味方なし、何所からも指さるゝ事な
きやうにして堅固お自分を守るより外に世を渡るべき方もなければ、
扱其後の如何となれ心引きしめて日を送るべしと覺悟の臍を初め
て固め、是より謹み慎みて人を迂濶に頼み思ひせ、自分羽指とさき

しよ權左衛門が亡き跡を弔ひて恩を謝しつゝ、ひたすらお唯自分を
のみ責め、自分が職業に油断なかりけり

第六十六 浪湧き風醒し

彦右衛門二十七歳の聲かゝるとき羽指となつて初めての船出、かり
そめながら生月の地も既早九年十年踏み馴れ、勢子船の上に居て浪
風も揺らるゝとも今は座蒲團お胡坐かいて坐つたやうお思ふやど、
然も荒業に元來好き身体のひとしは好くなり、骨組がつしりと肉緊
り筋強く、潮風に吹き黒めくれ日の光りに照り黒めふきて、桃色な
りし面の色赤黒くあり、眼ざしも自然鋭くなつて、天晴立派の男と
と誰が見ても云ふべき恰服、殊更我今年の一廉の手柄せいでと腹
の底よ持つ強みもあり、世と獨り立、他と他れ勝手と考へ定めたる
含ともあれ、意氣組も何となく違ひて、いよく人揃へも濟み御

崎お廻り、西沖に下り鯨目的に漁ることとなりぬ。打續いたる日和長閑よ冬とは云へど海も荒れねば、五艘の流し番鯨島に沖五里ばかりより陸地向ひて段々に列び伺ひ居り、勢子船雙海船と鯨島、鞍馬前、たかり遊よ漂ひ居り、羽指一人船押一人づゝ山見番所に上つて伺へば、干草、名残、鞍馬、鯨島、たかり、旦那山、いあり山馬れ頭、大賀白崎崎瀬神崎、其所等其邊お扣へたる番船ども片唾を呑んで待ち掛け、手ぐそね引いて長須鯨よせよ座頭鯨よせよ早來よと此等と待てば、眼を光らして大谷入りよせよ袴瀬戸落しにせよ田浦落しにせよ何方から來るとも見逃さじと彼等の意ふざる折しも、空合面白かふ遊變り來る様子に、皆々用意して、恐れは爲されど吹き出そべき風よ覺悟をする時ふるわき、長風颯々ど吹き來りて水やゝ騒ぐ途端、四枚つゝされ遊印虚空にひらめき、風お横折きは爲なが

ら立上る烟りの合圖は高里山、それと勢ひこんで各々漕ぎ出す船矢よりも駛く、八挺の船を押切りく水煙立つて四方八面より追取巻きつ、座頭鯨と見るや印を艦れ方よ立て、網代に近くなるまゝお船配り手抜なく、其間五六十間ばかりに列び、長さ大抵二尺有餘の丸木の棒を双手お持ちらつゝ勢子共一齊よ表れ舳を打ちたゝきく間を作つて狂ひ狂ふ浪よも羨まき風にも羨まき、あゝいゝ聲して驅立よば、親父等と鬢髪いつまか風に解かせ陸を揮つて、逃おくする鯨れ先をば遮ぎりつ或の後より逼り、右を指せば勢子船右を開けて左お廻り左を指せば右へ廻りて、いよく網代に追寄せたる時、汐合量り考へて一番船れ親父双手に持つたる陸高く揚げ、二打三打ち合はせく網結合はすべく知らすれば、待ちよ待つたる雙海船艦を並べて二艘づゝ都合六艘十九端れ網れ端々小繩にく結ぶが否や漕ぎどが

れ、瞬く間に眼り渡す、此時外さず勢子船等の鯨が前れ一方ゆるし
左右と後れ三方より迫立く迫立て丁々ど船端叩く音、どつと揚る間
此聲、生命知らせれ暴男等が氣も自然猛り立ち、息も吐のせず吹く
風に顔も背向けせ眼も睨がせず、浪れ音さへ消すほどと聲振り絞る
叱陀をば、狼狽騒ぎて前にのみ進む鯨と網にかゝり、必死とあり
て尾鰭うごかし暴るさバ暴るよ、從ひて結び合ひせし細網切を幾重
ともなく纏ひつく網をむ向も逃れんと、今一切夢中よて取り圍ん
だる逐船れ列突き崩し水渦巻かせ、深く沈みて軽く泳け出で、霧雨
降らし潮吹き上げ、再び遠く逃れんとするを逃してなるべきやと、
木れ葉れ如く漂ひさるる船乗りつけて親父共我一番と銛つけんと先
を争ひ競ひかゝり、動めく船れ舳先と突立ちのたかつて、三徳と銘
きつたる萬銛生鐵よて作りあしたる身れ長さ三尺八寸量重一貫五百

目餘椎れ丸木れ柄れ長さ八尺をかりもある物を両手に持つて振りか
ぶり、一振り振つて投げあぐれば六七間を隔つたる鯨と見事申るも
あり、二艘ばかりれ船を隔て、投て充分刺さるゝもあり、遙隔てし
ところより檣柄一丈二尺身れ長さ二尺一寸、十三尋餘れ矢細ついた
る矢羽銛飛ばして中るもあり、眼れさゝ次第腕さゝ次第功名手柄は
爲勝れ一場、殺氣海を捲ふて浪湧き風醒し

第六十七

小人は山れ奥よも海れ果にもあり

一本なすれ二本ならせ銛つき立てるを羨む鯨、水底深く潜り入り、
尙脱きむと騒げども銛に付たる根芋長く、かゝす細しらせ繩など幾
尋となく其に纏つて引き行くまゝ、打任せ延さるゝが上、鋒燕形な
る生鐵れ萬銛深く皮肉に食ひ込み居るを曲りてそれと折れせす、
引けども遂に抜けせして如何にをさども逃るゝよし無く、少時経て

浮み出さば、またも烈しく突立てらるゝ銛よ苦しみ弱り悲み、雷を
も凌ぐ聲あげて唸り鳴くまとおびたしく空お響きて物凄し、既海
面の血にかりて韓紅は浪おさましく立狂ひ、流石は大魚も浮ぶたび
毎突かるゝに次第々々力衰へ勢抜くるを見るよりも、いざ劍切を爲
て呉れむと金剛力士をあざむく如き赤條々は羽指をも、一丈二尺は
柄つきたる見るさへ身は毛のよだつやうなる中身とも三尺あまりは
劍は刃先を揃へて待つたる様云はう様あく惨然にて、後世は罪報も
目前は危きまとも思へばあう、二貫目足らぬは劍とりしぼり力任せ
お突き切りて、殺まひてゝ難難なり沈鯨と仕なしては引き揚げ難
しと思ふにぞ、半死半生七頭八倒もがき苦しむ鯨は頭上よ身を躍ら
して飛び乗る羽指、動くがまゝに浮きつ沈みつ手形切と名づけたる
大庖丁を振りかぶり、柄も砕けよ中心も折れよと潮噴く鼻は障子を

切り穿き、切望し相圖に庖丁を頭上に高く差ま上げれば、心得たま
と一人は羽指手に障子釣り綱持てるまゝ水お飛び入る浪をくぐり
て、切り穿つたる手形は穴お綱引き通し船に繋ぐ其間お他は羽指共
と背とぬは老腹といはず例は劍にて突き切る三味、刃先臙腑に達く
時に傷口よりして潮入る、泡ふつくと湧きあがる、塵持親父の
機を見計らひ塵を揮つて相圖をあせば水練達者は羽指等と大綱持つ
て海に没し、鯨は腹は下をバ泳ぎ胴と縛りて浮み出づる様、さづけ
髪面を掩ふて血交りの満額を染め、見るから夜叉の相好なり、斯く
て鯨を船お繋ぎ、上の胴細下の胴細よて引き、いづれも意氣揚々と
自分等が手柄誇り顔に、船表の印幟風に靡かせ、御崎の浦お寄せ來
る形勢、勇ましくもまた勇ましく。

彦右衛門羽指とあつてより或時と先を争ふて一番萬銛の手柄となし、

又或時と暴れ鯨の網にかゝらず逃げ去るを追ひ打ちの羽矢鉾あやま
さ中て、仲間の眼を驚らし、或と浪荒れ風騒げる時、胴細つくるに
必死の働き、或と長須は障子切りよ掻り落さるゝも厭はずして、骨
身を惜まらず勤むるほどよ、勢子共の好くたもふこと一方あらず親父
等もまた歎稱して、船の船先の茶釜に浪の當らぬこととあれ彦右衛
門が鉾と功名のあふぬこと無しと褒めたいへければ、松富の覺は悪
しき時さく、褒美も幾度か貰ひて役割も年毎にすゝみ、遂は親父と
云ひるゝまでなりしが、うたてや浮世の眞面目な男ばかり居せ、素
直な人ばかり居せ、自己が足らぬを省み、他の幸福恨む如き小人と
いふ奴、何處の山の奥海の果もありて、思はぬ恨みと彦右衛門受
け入る。

第六十八 さても大人氣ない仕掛喧嘩

備後の國田島のもの五十餘人八月の中旬より生月お下りつき、御崎
れ納屋場お綱すき綱うちを爲すこと毎年の例となつて變ることなく、
中よも巧者なるは綱大工と取り立てられ、常に納屋に居せられて
二年古三年古などの綱繕ひを爲せられ、普通なる男共の翌年の春ま
で返り居て双海船の加子とあり、綱張る業をするものあるが、同じ
田島生れの金四郎といふ男、一体の他所の者の入里交るを嫌ふ勢子
船仲間には獨り抜けいでゝ加ひり、國へと歸るまど無くして富藏が下
につき、かれこそ彦右衛門と同じ頃より働きのじめしが、年を重ね
て経験の積めると、元來人の鼻息を伺ひ巧に笑ひ巧に言ふ佞利の術
どが身と助けて、今と羽指の幅利とありままし、下に對ふて似而非
強がり上に對ふて忠實ぶり、逢ふほどの人と備着し世を送りしに、
或年の春、氣先の荒き上り鯨に打つたる鉾の一番二番を彦右衛門と

争ひしが發端、それより深く恨を抱きて何日かは彦めよ赤恥のよせ、
笑ふて呉きんと汚き心と底に持ちしに、其次の年も充分功名され又
其次の年にも自己之左程の事も仕出さず却つて憎しとおもひ居る彦
右衛門にのみ手柄されて歪んぶる根性にこそすく面白かろせ、始
終邪魔のみ横より入るれを何時も正路の彦右衛門に勝を取られて無
念さ積り、喧嘩仕掛の雑言を機にふれては言ひかくれど、是亦世路
の味を知り、堪忍袋の緒をしめて涙りも怒りも笑ひもせざる彦右衛
門が大抵の事の避けて通して相手おせねば役たろせ、殊更親父とま
で云はるゝやうなまじしを見聞につけて薄腹立ち、過失のあれをし
仕損玄のあれをしと他の幸を羨と他の不幸と冀ふ腹の中を、左様と
は日比の舉動に悟つても格別氣よ留めざりし彦右衛門、多久島と大
島との間より來りし大背美お我が氣よ入りの茂助といふが一番萬鉢

つけしを、其功奪とんと實際は二番ありし金四郎が強ひて自己を一
番ありと誇るに片腹痛くて、否然にあらせ我證人なり一番萬鉢は確
よ茂助と、云甲斐なくも新前の茂助を助けで黙り居る多勢の中唯
一人押し切つて云ひ通し、我を張る金四郎と遣り込め玄が報つて來
て、漁の期も終りし今日しも松富が家に招をきての歸途、馴し道
とて一部の浦より、飲みし酒の酔を吐き、既足元の暗くなる頃
時に還る小禽など見送りつゝ我が住居へと辿る時、右は浪打ち際左
は草叢の一筋道の前面より來るゝりし金四郎、同氣求むる無法漢
二人ばかり引き連れて、飲みたる酒お顔と染めなし、大手ふるつて
何事か高慢らしく語り合ひ、踏々眼々此方へ來しが、摺を違ひさま
彦右衛門と見るより早くとんと衝突。オ、親父か、親父おれをど
て左様と高ぶらぬものあり、人に衝突らる謝罪めて行くべしと聲高

に罵れば、其尾ふついで二人は男、謝罪めて行け白痴め、イヤ親父殿であつたう、堪忍して下され、然しお前様が悪い、手ありと地おついで謝罪つて行あるうがよいと嘲弄するよ、さては金四めが銚を一番で通してやぶざりし恨みと含んで今出逢ひしを幸ひに、せめての我に恥あゝせて腹癒さんとの所存なるべし、馬鹿おは負くるに若くことあらじ、往時と我も血氣に任し、要らざることにも手を出せしが三十越えて児童らしき喧嘩騒ぎも阿房氣なりと。悪めた〜互お酔つて居るバつら肩の衝突つたばかり、別に悪氣で仕たことならねば堪忍して呉れと理をもつて身を非に落し物柔かな云ひ譯、聴くつもりならねを耳も入れぬ、悪氣で爲れて堪るものおは、過誤あるばこそ唯とづらお謝罪れといふものゝ悪氣とあらを踏み殺して呉れむお、誰も悪氣とは云ぬを態と云ひ譯おは及ばぬ、さては親

父殊更に突き當めたのの、酔つて居やうと居まいと汝の酒を飲んだでいあし、餘計な嘸語とさしわいて唯平つとく謝罪つて行けど、愚にもつらぬ無理暴言、さあ夫故にこそ謝罪めとてさあいの、何方おら衝突つたものか知れぬと、我が自分罪を被て謝罪つたれば好いでそないか、仰々しく此様事お願ぐとハ大人氣あくて氣耻らしいと云ふ下より、其親父くさい云ひ草が氣にくはぬ、大人氣あいも大人氣あるも謝罪る身には有るものゝと車を横よ推す云ひ草、折しも後より來るゝる女此問答お幅狭き道行きかねてたゝせめり

第六十九 此女そも何者

見るも厭ふて怖ろしくもある眼の前の喧嘩お、路ふさがれて通りかねる女の、齡は十八九、顔の色淺黒く、眼尻の深く裂けさるのみが難のつけどあるにて見たとある姿さりと腰付やさしく、誰が眼

よも美しとそべきが、立のたかまたる金四郎れ後、停まじ、困り入
つて扣へ居る様子を見るお彦右衛門氣の毒さ堪らず。何の兎もあれ
金四郎、道を開いて通してやれ汝が背面よ若い女子れ道恋はれて困
り居るを先刻のら未だ氣がつかせやと云へば、金四郎冷笑つて。能
くおれ汝の氣のついたれ、通さうと通さまいと我が勝手、汝の差圖
は要らぬおとなり、似而非親切の説法と聞く耳持たせ、それより早
く大地に手をつき恐れつゝまみ謝罪つて行けば濟むおとゝ意地悪く
も言ひ放くば、堪忍おらぬほど憎くのあれど此様な愚人の相手とな
るの此方の不覺、痴癪の蟲と躍れど其を抑へて無事よ濟ますが上分
別、勝たると詮なく負たると恥にもおらせ、愚もつかぬ押問答よ
時を費したりとて益なき頂上、敵手が三人なればとて此様な卑劣お
奴等露懼るゝにのあらねど争ひ闘ふおとの餘りといへば馬鹿々々し

さよ我少時此所の屈まき濟まさんと思々しさい腹にあれど左り氣な
き体を粧ひ、大膽お手をつき身を屈め、全く我が悪かりと、謝
罪おせせとも然るべきを分別の立優つたけ自分下つて頭をさぐれ
ば、飽まで増長したる金四郎、せゝら笑ひよ笑ひながら、も少頭を
低くせよ、詫るにしくの此頭がまぶ高いと、俛れ居る首を右の手に
く大地に没れよと押まつくるに、不意を打たれて額を地につき、倒
れかゝりま彦右衛門、此時勃然首をあげ顔の沙を打ち拂へば手掌
につく血べつたり、流石男の面よ血を出されどは堪忍難く、固よ
り寛容れ質にもおらせ、氣弱の質にもおらざれば、汝無禮の痴漢、
たゞと置かじと怒氣心頭に發せし思てせも拳を固めしが、いやく
折角忍びしものを此所に耐へるおとあくんバ心盡まも空となるべ
し、然なまゝと思ひ返して手向ひもせせ忍ぶ無念さ、自然と色に

編 後 り と な さ い

あふはるゝを猶冷笑ふ三人の。親父口惜いか涙と出ぬか口惜くば如何なまとしく敵つゝ来よ泣きたくば遠慮の要らぬ聲張り上げて泣け、池月島に居て船の上の世渡する親父とも云はるゝものを此やうな腰抜とはおもひなんぶが、さても頼みまいまとでとあると語り合ひつゝ、相手にあらねば手持無沙汰に、詰らぬ腰抜さんだにあり合ふたとあるで妙でもなし、一部浦の方に行うと打連れ立つゝ三人と彼方をさして立去る後、影見送つて立上り、覺て居よと口内にて人には知らさぬ獨語しが、来かゝりし女の先程より始終の様子残るを見居れば、鬢髪亂れ血にまみれ泥にまみれ彦右衛門を見く氣の毒さもあま、殊更我が身に道を譲れと喧嘩の最中相手に向つて云はれし兼もあま、流石其儘たゝ摺り抜けては行き難きにや、懐中より紙と出して汚れを拭き居る彦右衛門が傍にすゝ寄り。思ひもか

編 後 り と な さ い

けぬ御災難でござりました、御怪我も如何やら大した事での無い御様子、まづく結構の事でござりましたが御髪の強う亂れゝ他の見たゝ何とうおもひまじしよ、汚れてゝ居りますれど御用立申まじしよかと、柘植の小櫛を我が頭上より抜きとて油垢拭き去りながら差し出す、柔和さ女の情あま。彦右衛門他は親切を無にすべきにあらねば、御親切あり難うござりまする、イヤハヤ下ふぬ喧嘩仕掛けられて飛だ迷惑、お前様の御通行をも妨げて大死に面目でござりませぬと共に歩みながらの挨拶、日全く暮れて顔ころ明瞭に漸く見ぬまじり行けど、聲の聞にも美しう聞かるゝ女、ろも何者

第七十 悪いまとも一つり来せ

豺に分れて羊に送らるゝ心地、彦右衛門やさしき女と道連れになりて徐かに歩む心の中はまだ鬱憤に安らねど、慰めらるゝに少しの自

分くらも笑ひさへ發するやうな事、口惜しうもしまとも忘れて段々家路を辿る道すがら、浮世話しうら其女の素性も聞けば、一部浦近くは母と二人暮し、夫と一遍持つたるふとあり、然もそれの納屋方の帳付なましが不幸にも縁付くと頓て間もなく死なれ、世にある習慣として、まだ若いを後家たてさするも氣の毒と實家へ追ひ返すやうに其家れ始うら突戻され、此家の良人の家妾が良人に去らざる以上と假令ば共棲の日短く借老の契も温かなるに暇なくして良人の亡くならきたまとして實家へ歸る了見のものとよき餘所へ二度の縁など思ひもつけせと、其當座と堅うあつて情より理に墮ち、是非とも姑御の御行末大切に冊き申し、亡き夫の代りと殊更身を粉に砕いても及ぶたけれ御孝養は爲すと、云ひ張つて見ても彼此の經驗に覺ゆるあまて分別にうしよき老人達承知せせ、實家の母と繼しき仲として眞

實にの妾がためを講じ哭きせ、縁付いたる先れ姑の飽まで異しいとあるに仁義張り、何うでも是うら榮やうといふ若い人を亭主もなしに妾の手元で使ふといふと出来憎い話し、第一氣の毒で堪せぬと表向の奇麗お云ひ放さき、取つたせよとあるさく翠の事尼にあとあましましよると味氣なく思ふたまともありましたれど、實家へ歸れば産の母あらせといふ云へ母と名のついた人の言葉は従えねばあらず、尼よなるせよと貞操を守るとあるさく達て再縁せよとの勧め、せめて亡き人の一周忌なと濟んであらと断り云へど、それの汝の勝手といふもの迷ひといふもの、若い身で其様な小癩いふもれでと無し、悪うの妾の爲てやうぬほよ妾れ言葉について再縁の口あり次第何所へなまると文句なしに行つたが好いと無情論しを、夫のあまりの御言葉と、つい云ひ返せば角目立ち、繼しい母ぢやとれもへ少し

の親子の間として遠慮も義理合ひもある筈を、怪しうらぬ我儘三味、
それはど立派な賢女あらば何とも心添などの此後仕ますまいが、其
代りよ何一ツ妾よ世話など焼おせず立派よ一人で遣つて退けて貰
ひましよと云われ、そきあらといふもの朝よ晩まで真綿よ針つゝ
んだ調子で當りたてられ、亡くならさる人其人の天命で亡くあら
ささものを何か妾が悪うて亡くしでも仕たやうに云はるゝまで色々
の云ひ掛け、是非なく何事も唯々と柳に受けてと居るものゝ、妾と
て石でも木でも出来て居らねば折節と眞に腹立ち、つい口返答遣り
返しを爲る時もあれど、然しての尙むづかしければ詮方なしに身を
責めて、鶏啼く頃より鼠騒ぐ夜半まで何事と無く意を用ひ、一にも
二おも機嫌そこねぬやう立働らさ、暇ある時には頼まれものゝ澆が
洗濯針仕事、女になる業なれば引き受けて少々と我が身から油と

絞り出す覺悟、今日も出来上りたる頼まれ物と是から持つて行く道
でござりまする、御家内様あるは知をし事ながら御前様も其後何う
妾等相應の御用ありませた節は妾が方に御遣し下さませぬか、住
居はこれくくくこのところ、大きな無花果の樹が目標でござり
まする、其樹の横手に蝸牛の殻ばかりなるが妾の家でござりまする
と、中々達者お辯舌お實事の虚談の知らぬと陳べ立つると彦右衛門
よははど聞き流して頓て立別れ、我が家お歸れば、これは又物事
悪いも好いも一ツは来ぬもの、二ツ三ツと生憎重なり来て我が氣よ
入道の茂助が腮のあたりに棒の打ち疵、此方と汝何したと問へば彼
方も親父額を如何したと問ひ返す、互よ仔細語り合ふて聞けば茂助
も今日が厄日か、矢張此春の一番萬鈺の争ひを根に持つてお彼意地
わるの金四郎が手につける加子と二人と同じ國生れの網大工二人

との四人も出合がしら、吹掛けられま喧嘩避けて通え難く、ねもふ
さま打擲いて匂配早く摺り抜けて来ましたか、斯う打ち出まて来た
以上の倭けたる奴原も指と脚へては引込まじと親父は分別も假た
くて参りましたといへば、彦右衛門腕こまぬき、如何でも彼様奴原
と島の外は追ひ出す時の来たと見ゆるは

第七十一 堪忍袋の緒の断れて

此方にも忌々しさの積り彼方にも恨みの重なりて、彦右衛門と金四
郎との中やすく悪くなりしが、多勢は暴漢を使ふだけ彦右衛門
は我身を謹まねばならせと願慮ふよと自然何事も後へ引き勝ち、打
ちたきところも我拳を我と宥め、云ひ返して罵りたきところにも
我が唇を堅く結びて、成るべく血氣に任せざる舉動なやうよと
れみ心掛くれれば、敵手と又、勝てば譽れなき負くるとも耻おはあら

すと、三割も四割も争ふて利あるに勢ひよく、動もそれバ事あつけ
物よつけ、突掛つて来て我意を振舞ふ面憎さ、無事を計れば付上り
て随分堪へかぬるほどの嘲弄することも度々、それを傳へ聞いてと
茂助が齒を切つての腹立、何日のは此茂助めが代つて彼金四郎面は
じめ残らずと打つてく打ち据て呉れむと、捨て置れば大事とも
なしかねまま権幕あるにぞ、彼様な奴輩相手にするは不覺悟とい
ふもの、決して手出しすあ、構ふなと嚴重に教へ諭して、漸く何事
も無く済まえけるが、到底其儘よと驕りきつたる金四郎の方で止め
せ、悲しきと思慮足らざる茂助の、少しの悪口に堪忍あし得せして
遂に一部の浦外れでの争闘、足腰のさうぬまで却つて相手に爲て遣
られ、半死半生とせられて然も腹の煮ゆる嘲弄、口惜しくば汝を最
負にする彦右衛門を頼んで来よ次手に彼をも打ち折いて遣らむと云

はれ、無念骨髄に徹して空まゝ眼を傾らし身を悶ゆる折しモ、其由
開て驚く彦右衛門其場に駈けつけ見む、無残も晝の鼻を諸鳥の
翔るが如く唯一人の茂助を四五人して責めさいなむ様子よ我を忘れ
て躍り出で。汝等理非の如何にもせよ一人を多勢で取り圍と、衆を
待みて腕づく沙汰とはさてく見下げた奴輩なり、相手の茂助の我
が懇意、見て此儘ふと濟まされず、我等卑怯をみづかふ耻ぢ茂助を
背負ふて我が後よつき家まで來たふば免して遣ふむ、左なくば我が
敵手となり、眼の飛び出し耳朶の巻き込むはど打擲いて呉れむ、さ
あ謝罪らむ今の中、返答ないは隠したかと仁王立よ突立つて磯打つ
浪の音より高く聲凛々と罵れば、流石よ少し氣を呑まれて少時の答
なかりしが、動き出たる金四郎が、小癩の事を云ふ奴かあ大地に手
を突き狗の如く匍匐ながら謝罪つた汝よ誰か従ひ、餘計な事よ手

出しせせ過言を謝て去らば宜し左なくば汝も次手なり云ひたれこと
もある奴あり、袋打さよ仕て呉れむと肩いからせての賣言葉、常よ
は更に買はざりしが今日の目前の茂助の態見て既堪へど怒り居れむ。
何かよつけて我よ當り、舟れ上れ仕事に意趣と根に抱いての賤しい
仕向け、日頃あら悟つて居たが汝の如き汚き奴を相手よするが氣
耻しくて今日まで堪へくしが既早免せせ厭ながら相手よあつて得
さそべし、汝も我よ云ふことあふば奇麗よ云ふたる其上で、眞綿の
中よ針を包む卑しい手段を回らさせ立派よ我を如何でも爲よと嘲け
る下より金四郎、斯して汝の其面の再び我が眼よ入らぬやう押片づ
けて呉むものと潮よ推れて流れ寄りし棒切取て打てりりぬ

第七十二 前途よ見ゆる人の影

怒火心を焦しては手れ動きやうも足の動きやうも自分ながら分る

なり、おもひを知らぬ他は頭上も拳も加へ脾胃を足蹴りもするものなるよ、まして堪へくし彦右衛門の今しも打つてゐらるよ、堪へさきせなり、奮然として叱する一聲、飛鳥のごとく身を躍らせて打下ろし来る棒に空を薙がせ、鐵拳早くも金四が加勢の一人の面を鼻血の出るほど充分撲き、前後左右より其間に亂打を逞しくする四人、彦右衛門も幾箇かの痲痕、幾箇かの疵蒙りしが、痛をも痒みも覺ぬをこそ、眼の中怪まき光を發して紅色ういやく顔面の上、首筋まで赤うなつて荒れに荒れたて、固よ力量の勝れたり憤怒に意氣は鋭くあつたり、縦横無盡お隠せま姿まを打ちつ撲きつ我を忘れて闘ふを他所より見なば小兒らしくもわれ當人は一切夢中、入り亂れて挑み争ひし、此方は飽まで免さる覺悟、彼方は金四郎のみ彦右衛門を眞實打ちも殺さん所存なれど其他は左まで決心の臍固

めたるよもあらねば、餘りの烈しき彦右衛門が勢に恐をあして、一人逃げ二人逃げ三人逃げ、残るは金四郎一人となりぬ。得さりやと益々勢つ一方、漸萎む一方、一人づゝの負勝は彦右衛門勇を發して金四郎を蹴据ゑ、警引攫むで大地に押えつけ、汝が心の邪曲かぶ出し報覺えたか、日頃よりして我を陰に陽に譏し嘲ま、組の者の一致を妨げ仕事の邪魔をはたさき、自己が汚穢根性に照らして横直なる茂助を憎み、一番萬鈺の功名奪はんとして出来ざりしより其を根よ持つて様々の企て、我を何日ぞやの能くこそ大地に手をつめて謝罪せま、其節とても引捕へて此様にするに造作と無かりしが狗猫同然の汝等敵手にするは大人氣なしと齒と切つて堪忍せしにつけ上り、何の罪あき茂助を汝等申し合しての袋藏き、了れで心よ耻かしくさいう、恥を知らぬ畜生をば打つより他に法の無し、痛い痛いの、

痛い知る、汝のやうな奴此島には置きがたし、頓てハ松富は
隠居に云ふて池月地は踏ませぬやう仕て呉れねバ我が腹も愈々
島のためにも悪し、但去痛い身も浸みて先非を悔み謝罪るか、大
地に手をつき三度四度彼茂助にも此我も真心こめて謝罪るう、返
答あいは小癩にもまだ意地張るか痛うと無いかと小砂利の上に面押
し當て、幾度となく打ち敲けば流石も抵抗ふ方も抜けて口惜涙に齒
を噛むばかりなれど、尙剛情一語も出さず、汝口惜くて涙が出る
か口惜涙をこぼすだけ未だ男兒らまいとてあれど、謝罪ふ心と
て謝罪らせずに置くべきやと、頭髪つかんで引きすり行き、満身の
打傷も苦しみ居る茂助が前に頭押しつけ、幾度と無く磕頭さすれを、
弱り居あがう小氣味の好さよ笑を含みて動けぬ身を辛くも起し、
眼尻釣り上げ怒り悶ゆる金四が面に唾吐きつけ、畜生汝おぼれたう

と僅よ一何罵りけるが、金四何とかおもひけん眼を閉ぎ首と俛れ、
謝罪りたると叫び出しぬ。彦右衛門尚冷笑ひ、今となりての謝罪汰
沙、苦しさまぎれの一寸免きか、其手と食ふ我なりと迂濶に信せ
を遣り返せば、いよく弱る息細く、眞實よ謝罪つたる上と何れや
うおあり存分に爲て下され、決して此後敵對せじと身を投げ出して
眞底よりあやまり入れば、根が胸狭かろざる彦右衛門、さらば汝身
の動けるやうなり次第かあらず此地を立ち去つて再び我が眼の中に
汝の影の映らぬやう何國へなりと行き仕舞へと罵りて僅よ首肯く
態を見済し、既早此所用はあし茂助我が肩にのれと茂助を働は
り、肩よして我家の方へと心ざし四五町歩む折しもあれ前途に見ゆ
る人の影

因縁の糸は何所へ如何牽かる人も知れず、彦右衛門茂助の氣の毒が
るを遠慮する事ういと論しながら我肩にかけて、家路を辿り歩むこ
と三四町、心付けば自己も背お腿は膝に脇腹に幾箇所か傷められた
るところありて、怒氣の消え行くに伴れ痛みも覺ゆれば疲勞も覺え、
咽喉の渴きて呼吸安からず、氣の張るこそあれ少しは身の惱まなく
れもはるゝ折しも、前面に遠く見ゆる人影、若しくは金四郎が一味
の者の來しものと危ぶましが、近づくと見え小奇麗な様子して
小股歩行に歩き來る往時何物なるべきの知れぬ伶俐さうを五十恰
好の婆、其後に従ひ來るは多分見たことのあるやうな女と、おもふ
間もあく先方より聲かけ。親方様如何おされました、お顔の色もた
いあらぬ御髪も亂きて、加之御怪我もされし御様子、御同伴の方も
ひと方あらぬ御怪我、と氣の毒さうお立ち止まりて親切お尋ねくる

一聲はたまかにもれよ、過般、金四郎めに我が喧嘩仕掛けられて弱
りきりし時通りかゝりて其より道迷になりし女、深くも氣に止めさ
りため殊更心地の常とは今變り居りしたため思ひ出さうりしが、思
はずして今日また逢ひしも不思議なりとねもひながさ。詰らぬ争鬭
を爲て此通り始末、いやはや御話しにもならぬ事ありと軽く云ひ
捨て、其儘黙禮して立ち別きんとすれば、おねて聞たる女は繼母ら
しき婆の愛想よく。それは飛でもない御災難、此所より妾等が住居
と直近所、ならば御休みなされて行かるとも何の御遠慮のさいこ
とあれば、御立寄りなされて御湯かと召し上られての如何でござり
まする、打傷よの良い藥劑も幸に持ち合せてありまする、お新汝の
此御方お御懇意と見ゆるお妾の前をかねてか知らぬ何故其様にば
んとして居る、共々お勧め申すがよぬではあいかと一寸睨みあがさ

編後りとなきい

妙に云へば。女は當惑した様子、別段御懇意おしたといふでござりませぬと此所でいふも異なもの、さりとして左程懇意とれもはれては痛う無い腹さぐらるゝも辛しといふやうな顔付せしが、母も彼様申すもれなれば御立ち寄りあされていど耻かし氣に心配氣よ云ふよぞ、彦右衛門も婆が娘と見し眼の中よ厭もおもふところはあれど目前の都合よさよ、ありがたきよ答へて導かるゝよへ行けば、成程先日聞し通り無花果の樹の大きよ茂れるがありて其後に小ければ汚らぬ家のあり、此所と女と駈抜けて先へ入り、温湯汲んで出すやら、藥呉るゝやら、有難しゝを口續けにいふて彦右衛門、身内を撫り、茂助をも介抱し、夕暮まで世話にありて厚く禮謝述べ、いつれまた改めて御禮よ出づべしと懇數に挨拶して提灯まで借り受け、我家へ無事よ歸りける、

編後りとなきい

茂助の怪我も利器で斬られたるよも突かれたるよもあらざれば、養生する間よ頓て快く癒せ、彦右衛門が身体よ固より左まで傷つけられしにあらねば猶更の事早く癒りえが、此間幾度の母に云ひつけられしとて見舞よ來りしれ新が親切、面と合すこと多きにつきて話しも濃おになり行き、互に氣性も大方の知り合ひしが、いよく茂助平癒の曉、彦右衛門其折の禮云はひと二人打ち揃ふて禮謝の印の餽物立派にとゝのへ、れ新の家を音問ひしに、平癒の喜び喋々しく陳べし後、歸らんといふを引きとめてまづ一杯とお新が母の饗應、何やう底意のありさうなことなり

第七十四 女房が大難大罪の種子

其日と取り交せたる浮世ばなしに主客打ち寛ぎ、殊更婆も娘も少しの飲む口あるにいよく淋しからせ、ハ、と笑ふ聲はホ、と笑ふ聲

と交りて、賓客が亭主の手助をも爲る位に親しくなれば、彦右衛門も茂助も充分快よく酔ふて歸りけるが、歸りては後茂助酔ふ遠慮失せて聲も低めせ。親父よ彼れ新といふは豫てより汝に意のあるで無いう、知つて知らぬ振の知らねを談話中の眼づらひおも色に見ゆるはどなる上随分容貌も醜からせ小機轉も利きさうな女あれば、勸むるの異なるものなきを親父彼女をば世話してやつて何であらう、我とても未だ獨身なるに小癩らしく生意氣に年寄ぶつた世話やくでとなければ、既女房れあつても宜い年齢と親父よ對つて松富の御隠居が云はれたこともあるを聞て居るし我も然おもふことのあるに、丁度縁あつて彼娘と知り合ひになふれしも不思議、先方では確實よ所思のある様子、親父も満更憎うはおもふて居まいあれば、花を茂助にもたして我よ此事の周旋さするとも悪うはなかるべま、其代り

よは行末まゝ自然親父よ我が噂の取り持なを頼むの知れせと笑ひながら語れば、心易い中として隠し立せ彦右衛門も笑ひながら。實は我とても彼女を嫌ひもせせ、又他にも見ゆるほどの事を見ぬで無ければ、彼女が言葉よよつて大方の推して居る彼女の母の心立かもしろからせ、殊よは繼母といふ奴の良くないは世よある習ひ、面倒くさい氣兼ねるの出来やうよりはと思ひやれば今れ分で居たが増しかも知せ、彼女もまた如何あつてもといふよもあらせ且は再縁を氣よ掛けて充分臆して居るらしせば、我あらい云ひ出すの我が事を見好むといふものよて厭あり、眞實はまた再縁を厭とおもふ我が了見もあり、何も無くてならぬといふ譯れあるでもあければ女房沙汰の少時不用なま、併し汝の親切を無よする譯でいなしと云へば、互ひよ笑ふて其夜の濟みぬ。

茂助が了見よの、繼母なればとて決して悪むものとはばかりの定まら
せ、殊また新が母に二度三度逢ひたきと義理は賢く世才に長たる
のみにて是と指すべき悪人よあらざるは我等を扱ふ様子にて知れた
こと、他所視より確と分らぬは却つてお新の性質、先れ夫よ義理立
て、繼母れ意よ従とぬとの彦右衛門から日外きししが、實際を見れ
ば彦右衛門よ意あまげな舉動、前後相違よの仔細無く叶はぬ筈、
それとも世にいふ三月後家にて、夫よ別れし當座さる亡き人戀しさ
よ我儘云ひしもの、時日の經つに從つて男あつうしくなせ、そきよ
戀の出来しものか、大抵は似つうはしき縁とおもへば、一方なら
せ世話よなせたる彦右衛門れ利益にあるよとならば一肌ぬぎて骨折
るべきも、我が智慧の愚よて雙方の了見確と分りせ、いつうれ事よ、
耻うしがるうは知らぬと十六七の小兒でいふし思ふほどのこと云へ

ぬでもあるまじけきバお新に逢ふて直接に聞き糺して見るべき、當
人同士なると随分磊落の女なりとも男なるとも互ひに云ひ難き節れ
あるべけれど我よ向ふてと、唯我が眞實さへ了解らば毫末も包み隠
すよとあく彼女も云ひ得るあるべしとおもひ定め、少しは自分も内
々きまりの悪きやうな心地の仕たれど、或日母の居ぬ時を伺ひ、お
新に逢ふて仔細聞いて見れば廓然と分つて何の仔細なく。到底我意
を徹さでは置らぬ母の言葉お従はねバ濟まぬ妾身あらば、喧嘩の一
條聞いても知れたる氣心、頼母しき彦右衛門殿よと後は云ひりねて
顔紅めしが、少時たつて、一度男を持ちし身なきバ及びはあしと諦
めて居りまるとの口上、此所に此女の眞相觀破るべきとあるのあ
るに、其も左様なりと考ふることもなく承知せよ茂助、いろく口
さいて遂に彦右衛門を其家の婿分になし、まづは目出度くを云ひ

離しけるが、誰しも妻持つに其女の性質根本見定めておらにせぬが
往時のあまさま、彦右衛門も齡を老けさせ、女房も手懲りせしめ
ともなければ、迂潤りお新を女房とあせしが是よりおもはぬ大難大
罪をひきいだしぬ。

第七十五 其儘に日を送りける

男子ほど馬鹿あるものは無し、自分參天の喬松といふ風にて好い氣
になつて威張る中、得て纏牽りたがる藤やら葛やらに身を瘦せさせ
らるゝ如く女といふものに巻き着かれては兎角脆くも伸びんとする
方に伸び得せなり、思おぬ方に屈するやうなり行くものあり、彦右
衛門お新を妻おしてより、世の人の免かれぬ習例とて彦右衛門も珍
去物大切に情に制せられ、其當座蚊屋を二人で疊みけりとの穿ち通
り、無法お一切ものやさしく、何事もお新が云ふあり次第、云はぬ

ことまで此方から口と添へて親切をはれめかすはせなれば、お新
ばりりり繼母まで毎日れ笑ひ顔、一家むつまぢう浪風なまに日と送
りけるが、人間一生の幸福を時を新婚後百日といふ眞實お百日と限り
たるだけが酷き罵詈ながら、何程薄情の男子おても我儘お女にても
百日の間ぐらゐは美しう暮ともれ、是第一に愛情の熱の發りたてな
まば互ひに強きが上よ、馴染も尙薄ければ遠慮といふものあつて心
安立おく自然禮義も備はる故、和して敬し一体にまて別あり、心狀
も舉動も美しきところ實際有るららの事あるべし、然れど馴るれば
美しうばかりはあらせ、正直一方れ彦右衛門段々と共棲れ日かさな
るて、或時は浮ついたるお新が笑ひ聲を氣よ入らせ思ふことあり或
時の世間話しも繼母が齒齧露してれ冗饒舌と快からせ思ふことあり、
遂よはお新を論をことあり、論して忘るれば叱ることあり、私に了

見の持ち方面白うぬと憤ることあり、氣性の違へるを忌々しがることあり、殊更繼母の阿諛がまよく喋々と我が力量を賞めちらし我が俠氣あるを奪みちらす風情なを剛直の心に較べては厭にて堪らぬ、日に増し見ゆる襤褸の眼障りとあつて、夕飯の酒も甘かりしと三月も四月も前の事、今と母親の追従口聞く耳に五月蠅く、若や我明日明後日一文も拵げぬ身とならば直に追ひ出さんとするやうな婆でかなあろう扱も苦々しやと内々は疎めば、年老れ癖に厭味たふしく酌して呉るゝも却つて其親切めいゝが胸悪く、颯然と家を出て茂助が住める松富が持家に到り、男同士の無風雅な下物でしふへも氣の合ふたゞけに快く飲める種とありて互に罪の無い事語り合ひ、夜深て家に歸り来るよ、内では何の物争をひする様子、仔細あらむと平常の如く直には遣入らぬ伺ふに、あさましやお新と行燈は蔭に顔横む

けて唇と尖らし居れば、母はまゝ火鉢の傍に肩聳して手お持る煙草管を暴くたゝき、汝は誰が世話で今までは大さうあつた、獨でゝも育つたやうに高慢くさい顔付が好かぬ、我のいふこと何時も茶にして賢女ぶつた云ひ草が氣に食とぬと、彦右衛門と前々から乳繰あつて居たまばこそ平戸へ再縁すゝめたに強て剛情張り通しなれ、それと推しても大眼に見免して、茂助が云ひ込みに邪魔も入れぬ汝が思ひ通りに爲てやつた恩も思はぬ、やゝもすきを他を繼母あしうひ、一体あつば妾の粧をさうして遣つたと真底ありがさがりて、彦右衛門に充分吹つこと、夫婦して妾を大切にすべきに、御機嫌とれば好い事としてつけあがり、日頃妾を下女かなんどのやうに扱ふとい怪しむぬ沙汰、毎夜下物之頭付にし酒之灘にし、さあ召上りましと膳立して其方で妾を待遇しても好い筈あるにと、聞くさへ耳は痒い

やうな賤しいことを、何事より云ひ出しか諍々といふに、腹の汚さ
見透きてますく彦右衛門心地悪く、今歸つた積りにてすつと這
入れ、顔を見合すより不平を今まで云ひ居りし母の莞爾顔して、
好う早う戻らした、茂助殿も御機嫌好くてかと空々しい無益な問言、
返辭するさへ懶きはと憎く、此方もよい加減に挨拶して眠りぬ
夫婦となりてと随分飽きも飽かれもする者あがら、また人の知らぬ
ところに好くもねもいさ好くもねもふところのゐるが世人の常と見
ぬ、傍眼からの彼様に仲悪きものあらば互に離別たが好かるべしと
見ふるゝはどの夫婦が引き別れもせず喧嘩しながら年を老りて子
供の七八人もこしらへるが有る例、彦右衛門も其の次の年とじて
子を持つて嬉しさの頂上に登りてれば、自然また女房が氣性の何
も氣に食ふところあり繼母が根性厭はしきところあるも忘られて、

其儘に日を送りけり

第七十六 父様の御船の出づるぞ

三年添へば惚れきつた中にも互ひの瑕疵見えて、女房去け、唯去き
ませうとの感情も時にと發るものあがら、何時の間にかやら子といふ
鎧の出来て、妻の悪しきも此に見免し亭主に不満なるも此に慰めら
れ、百年の契り中途で破るゝやうの事あく終るものと、年から智
慧のついた老人達の能く言ふこと。彦右衛門初めての子に氣の浮つ
くはと悦び、宮参りにも及だけの費惜ませ、蟲出さずるを泣すあ風
邪引そると男子にと可笑な程の世話焼くも偽の無き人情、可愛くて
可愛くて堪ねばなるべし、お新産後の肥立も悪からせ、清々しく巢
を出て、其後と夫婦とも唯嬰兒をば可愛がる三昧、笑へば共に笑ひ
泣けば共に悲むで、日に増し生長つを見るバウりの樂みに夙く起き

編後りとなさい

遅く寝ね、面倒あるも小汚きも厭とせ、新太郎に、新太郎が、新太郎をと、新太郎といふ名のみを種々に呼び散らして消光しが、世渡る業と是非もあし、行きとも無ければ時節来れば今年も彦右衛門組出済みて御崎に廻り、いよ／＼暫時は船の上に身も心も置き家のこと事など思ふ暇なく働かねばならぬ、家を離るゝと厭ふれば業勤むるも結局と我子の爲と、恩愛に後髪引かるゝやうなる心地のするを我と自ら勵まし、剛毅の男も留守の中の心得幾度か繰返し云ひ聞かせ、さらば行く來るぞと立上り、門口まで出て再ふり願ひさまにね新に抱かれ居るすやく／＼眠れる新太郎の頬に我頬すりつけ、莞爾笑ひながら一ト眼お新を見く、大切にせよと云ふ言葉に無限の情を籠もらし残り惜げに立出づきを、今度とお新が跡追ひあけ磯まで見送り、父様の御船の出るぞ御辭遣せよと、譯もあいことを眠た子に

編後りとなさい

云ひけるが、船出例年の如く賑やかに、見送らるゝ人見送る人、聲呼び交を間に遠ざかりけり

第七十七 泣き聲たつると新太郎か

大凡百五十日ばかりが間と彦右衛門夢を我家に通とする事とあれ、お新が顔も新太郎が聲も見聞くとなく、今頃と定めし彼兒を抱き寐の床の中子守歌睡げにお新が歌ひ居るあるべしと想ひやる夜もおり、坐頭鯨の兒を愛しく兒に引かき寄り我が身失ふ態見くと、徐に我が生計の無慮に酷さを思ふことあり、今までと何とも感せざりしことに子を持つとより幾度か感じく、波穩かに風冷かなる時、星影薄く天低き夜半など、我乍ら女々しうなりしと氣のつくほど、分別の老けるが、愈々漁期も終りとあり、手柄も相應にありくいざ歸家のひといふ時、今までと唯久しぶりにく大胡坐ゆたかにかき、馴染の

酌女などに追従口きかれ、快く朋友同士で海の上の辛ウリしこと失策しことなど語り合ふを下物に大盃満々と受けと飲み狂ひ酔ひ戯るゝか、乃至松富が家に喚われ賞與貰ふた上苦勞憫ゝ酒宴に幅利かすか位の樂みを抱いて陸に上りしに、今歳いついぞ覺ぬ樂さ、一足も早く家に歸りて何程う大きうなりたふん新太郎が顔も見さし、一處に居たる時不愉快もふた折もありしが百日の餘も離さく見をバ憎くもあらぬお新に逢ひたさもあり、何に彼に嬉しさバあり胸に充ちく、漕ぎ近づけば漸く見ゆる覺ぬの樹の影何某々々の家の屋根、彼土藏の後の方にころ我家とあきと見るものにゆけ愉快こと限りなく、頓て船乗り捨てゝ萬の事濟みし上、不圖心付けバ今日總勢の歸るとい知れしことなるに母もお新も迎へに出ざりしが若や我子の病氣もどにて手の離さぬといふでと無さう、左なくバ何か行き違ひ

しかと心配も今さら湧きく、急ぎ足に我家近く來れば泣き聲うつる確に新太郎、胸まづ是に轟いく衝と内に入り、今歸りたど云ひながら、薄暮の空合に外のと明るく、家中とや、暗き時草履ぬぎ捨て、上り込めバ、明るさに馴しし眼の確然に見得ぬながら、抛り出したやうに寐かして泣くに任せある新太郎、亂まゝる室れ中、是れと疑ふ途端、お歸りなされましたと周章と挨拶する女房が息ひ、怪しからぬ、不屈、怪しや、確に酒臭かりし

第七十八

上弦の月光に知れあゝる仔細

平常あつた新太郎を泣かし置ぬたる廉だけにとも、堪へぬ氣性かど汝不屈な奴めと散々に叱り懲すべきところなれど、久しぶりにこの歸家に、先第一から叱言も餘り好ましからと彦右衛門自ら抑へく不平を押しうくし、何氣なく機嫌好き体にあしらへど、お新の舉

編後りとなさし

動何となく野の鳥の人を恐るゝやう見えく面白うらさ、無事の歸家を祝ふく母が世話焼き、心計りの内輪酒汲まかどすにさへ今までとの似せ餘所々しく他人行儀にあらたまどく、多加し言葉の例に違ひく少く、物思はしげな様子仔細あければなふぬと何しくも見るにぞ、是にと定めし蹊蹺あふむと心付まが問ふとも無益、知るゝ時にい自ら知るべしと其儘にしと彦右衛門は唯新太郎を膝に乗せ、一切の事を其可愛うまき笑顔に忘れ果て、何やう囁んでくゝましく、軟鞭は手に我が額たゝうまたどあどしく獨り悦び、女房にも母にも碌に口ひきかねど、話し仕掛たどとく返辞はあく唯語氣だけ悟りて莞然と笑ふ新太郎にのみと話し仕掛け、餘念なく共に戯れ遊んで遂には抱て寐ける

翌日は彦右衛門松富が家に招かれ、充分饗應に逢ふて醉眼ちらく

編後りとなさし

家に歸まば新太郎は母に抱きてお新は不在なり、何所へと問へば何やら買物に一寸出しとの答へ、頓て歸つて來し様見るに平常よりは粧り飾つて髪も艶やかに口紅も傅たり、買つて來し物一品も無し、質すべき不審のこまのまらさ、お新が顔見るとゝもに乳を慕ふて妻が手を離さんとする新太郎に和い顔も見せぬ無情さ、そも普通の女にゐるべきことか、胸の冷さも程のゐるもれ我子可愛うあいとは一通りならぬ理屈なくては叶ぬ筈、怪しや怪しや、扱は我が不在の中に新め心變りして、萬一他し男に情を通しでもしたるか、まさかに母の見る眼もあり新太郎といふものまであれば其様なことの有らうとも思へねど、昨日のら様子合點の行かぬことばかり、但しと一つ疑ひ出したるより左までなき事一切疑はしく我眼に見ゆるか、思へば昨日の夕方、我歸宅し時誰やら裏口より去りしやう

編後りとなさひ

にも思はるゝが是も疑心よりの暗鬼か、若しお新に怪しからぬこと
なほのあらば日頃仲好かぬ母の黙つて居るべくもあらぬ筈、お新
とてもまた左程大膽な女でとあるまじ、嗚呼迷ふたり〜我今まで
愚痴といふことは知らざりしに子の出来てより心弱くなり、女くさ
く物案じするやうありしが、連添ひ居る女房を假初にも疑ふなほ馬
鹿氣きつたる頂上、何しに其様を白痴きつたることのあるべきやと
思ひ返せば、別條は無ゆやうのものゝ扱一端發つたる疑念の故無く
と消えず、思慮密く萬事に眼を届かすれば、また疑はしいこともあ
り疑ひ解くることもあり、昔譚のやうに圍の戸の尻に豆を置いて忍び
男の有る無し試みることもせねど、二日ばかりの寸時も外へ出せお
新が舉動伺ひしに異つたことなし、さてい全く我が思ひ違ひなりし
と心に耻ぢて茂助が家音問れ、四方八方の話しの末聞き出したると、

編後りとなさひ

金四郎當時平戸の町に表面つくりう俠客面、汚い根性の隠して博奕
を渡世に、乾兒も二十人三十人もあるよし、可笑や彼様な奴が手下
にあるものもあるかどて二人掌を拍つて笑ひしが、夜も更けたまむ
と歸宅けるに我家の前にて足にかゝりしもの不圖拾ひ上げ、西に傾
く上弦の月にそゝして打見るに、鯨牙の根付、銀鎖、銀一文字の金
物つゝたる兩下の煙草入を、氣負肌の奴等が持つべき品物、行止り
の我家の前に落ちあることの訝かしく其儘持つて内に入り、つゝ其
所で此品拾ふたが明日にもならば人の眼につくところに釣り下げて
置けど、投げ出す其時お新の顔色變りぬ
第七十九 つきて逃げくの定り文句
お新が顔色變へしも道理、まことは其煙草入の持主と疾より腐れ合
ひく不義の歡樂を彦右衛門が不在の間に取りし故にく、今日しも相

編後りと なさ い

曳しふるのついで先刻の事、もう頼む彦右衛門の歸るころと推し歸したるの月の漸光り出す時分なりしに、鈍くも男の遺失物なぞしく、幸に彦右衛門の其品見知らねばこそ可けを拾ひあげられたるふ動悸りとせし譯、腐れ合ひれそもくを問へば言語同斷、お新といふ女は元來左程の悪人ではなけれど氣の弱い者の常と悪事は必き爲ぬと我が意を張り通すことの出来るほど潔白あるものにもあらせ、また耻づかしさやら、さまりの悪きやらより、一切我上を正直に言ひ放つことあんどの出来る質でもなければ、自然作り飾りも爲る場合の無用でなく、彦右衛門に逢ひて我身の上聞かれたる時も、實を吐けば、平戸の雜穀屋が一人息子、西海屋の傳太郎といへる滅法美男の間に高き男の許に果報めでたく歸しが、美男ぶけに傳太の品行脩ふせ、彼所此所浮れ遊ぶが上に賭博好きにく金錢を奪ふともせせ

編後りと なさ い

撒き散せば親父辛配の擧句、顔好き女を嫁にせむ少しの放蕩も止まむかとお新を世話する人のあやしむ迎たるに、自墮落の品行は尙止ませ、親父大に怒り、身代潰すは汝れやうな奴なるべし我身代潰しにかゝるは我子ではなし悪魔あり、出く行け出く行くと遂に勘當しく追ひ出しければ、詰ふぬ目に逢ひたるはお新、何の罪も無く飽きも飽りれもせぬ中引裂かれ、獨り寐の團淋しさを人知れど聊てど、親父底意あつて實家へは返さず、或夜ひそかに雨降る人静ある時、有るべき事か有るまじき事か鼠を叱るに紛ふしく忍び寄り、何の彼の五月蠅ことを云ひ掛まが初めに、其後は問ひな隙がな聞く耳さへ汚るゝことを掻き口説れ、お新流石にこれには弱まざり、無理や縁を切つて貰ふに實家に歸り次第、一別以來戀まき人に廻り合ひはせされど内心は其を樂みに他所へも縁づかず母の勸

めを無下に謝絶し居去なるに、打ち明けず斯は云ひ得ず口から出任せに談話せしが、縁は異なるものに、彦右衛門にも彦右衛門をも、何時となく憎かしく思われ思ふやうなりし後、茂助まで中に立つ事とあり、其虚言を今更あらためも爲かねまゝ、母にも忝み込ままゝ、別に不都合なきやう云ひ繕ひ置き、それありで濟せまは宜けれど、跡式譲るべき子の傳太より他無く勘當も畢竟之懲まめの爲にかりに爲し西海屋の親父は、人の口さくものあるまゝ傳太を呼び戻せまよる傳太また金銭の自由を得る或日お新を尋ね來たり、固より嫌ひ合はせざる當人同士あり、且また表面向き傳太かゝ離縁えたで無あり、なきに忽ち焼木杭に火の付きはこり、其後は男御苦勞にも平戸より折ふし通ひく三日四日は池月に止まり嬉曳しくは歸り行くを、知らぬでいなければ丸もれで眼に蓋をさるれば母も見咎め立は爲

ざりけるが、悪ムとは知りつゝも男に逢へば再び來るなども斷然謝絶りらぬるお新、今宵煙草入投げ出されく傷もつ脇の氣味悪く、暴露ねば好ムがと按じけり
彦右衛門何も知らねば左様とも悟らず、翌日の所用あつと、今日の歸家ぬかも知れどと云ひ置き、平戸へ志し立出でける不在こそ幸と、情男の忍び居る家わはたいたく音問れ、煙草入をまづ投げつけ、悄悄と地談合ふ事何、行末是では危けきバ兎ももの事に連れ逃くと、定りきつた形あり
第八十 開けよく彦右衛門が聲なり
お新を復我が家の床柱としく朝に夕に撫で愛まむの傳太郎が望むところあれど、連れ逃げたりとも池月より眼と鼻の距離ある平戸の我が住居に安穩と二人生活し得べきともれせへねば到底無益の事あり

編後りとなさい

り、また左様せずしく手に手とりかはし百里二百里離隔たる地に走り退かむには、危きことも無く夫と呼をれ妻と呼びて偕老同穴の契りを遂げ得べきのは知らね、折角跡取となりて財産やがくは我物となるべきを振り捨てる、顔知る人もなき他郷に漂泊せむの流石に心細く悲しくねもはれ、臆病なる心よりの其も爲まかぬれば、お新に迫られく兎角に返答に窮りしが、煙草入れを見くは己が身さへ危しと悟るのらに此儘あるべしともねもはれず。あゝる男の質とて頭腦の中清潔ならねバ一刀兩断に事と決しかね、吐息つくづく歎息の間々に、味も香も何どの知らぬで煙草ばくく喫すのみあり。返事の無い御不承知の、今さら黙つて妾にばかり氣を揉まそとは聞ぬぬとお新の恨とせがむに殆弱りし傳太茫然としく腕拱きしつ、連れく逃ぐるはよけれど何所ともふ目的もなく雲のさなり霞鎖せる他國に去

編後りとなさい

るは一寸の考へで定めかぬることは、よくよく我家を出されて職業もかく漂泊ひあるく辛さの味と嘗めく覺ゆる居れば、後悔の無いやう分別せで叶の老、汝は知るまゝが懐中に金の無くありて手に錢取るべき業のなぬ時はそれなく悲しいもの、とふて逃亡の相談に背を見せるではなく、又汝と一所に心よく生活したいは山々おれど、成る事あらば汝にも憂ひ目辛ひ目させず樂く世を送りたく、二人身儘お過せばとく、竹の歪み柱萱の腐ち屋根の家に住で鹿猿のやうに飽も無い生活をするは厭ふ、左様無いやうにどおもへば今の身でと詮方ありし、汝とくも母を捨てて、屹度後悔せぬには限らじと一寸逃れを道理しく云へど、お新女だけに胸狭く情逼れば其では承知せず。後々までを辛配しく何の斯のどと水くさみ云ひ譯、妾の母様を捨つることさへ勿体あるれど心で謝罪つて爲るものを、

編後りと なさ い

今更妾を何なれとての其お言葉、厭味まじりに妾が新太郎に未練でもわるやう云へるれを邪魔にころすれ露可愛うはおぼぬものを未だ妾をば疑つもの、舊と兎もあれ今は主ある身で恐ら思ひをしちがら、他の目襟忍びく逢ふ瀬首尾するに幾度胸を躍らしくは火を呑むやうな心持をせま事の知れぬに其苦勞を妾に爲せながら、さも悠長了見で居らるゝが恨めしと理も非きなまは掻き口説くれ、自然の勢ひ連れて逃げねバ男の腸の無ゆやうとなり、右も左も分別の出所無く前も後にも智慧の湧き道なくて、まゝよ連れて退いて何所になり暫時潛まむひと一度と思ひ、また一度はつくぐ、目前の苦しさと世間れ恐しさとより寧の事お新を思ひ捨て、此後顔も見せまじき手ともれもひ迷ひしが、さるべきものゝ断れぬが煩惱妄執れ習ひ、確とした返辭とあさで置きながら、彦右衛門不在とわらバ今

編後りと なさ い

宵更けて音問れ、其折向も密に相談すべしと約束して、あさましくも不義の暗を辿り畏懼れ徑を傳ひ其夜お新が家にいたり、聲もひそく二人去て何事をか語ひ居しとあるへ、来たもれゝ災禍り来られしものゝ災禍か、雨戸たゝく音烈しく、明けよくと彦右衛門れ聲あり

第八十一 今殺ささうとするも知らいで

思ひもかけ彦右衛門に歸られて吃驚仰天せしお新傳太、逃ぐるよ度さへ失ひて何と爲べきやうもあく、周章狼狽裏口より男を逃げさせんとお新雨戸れ掛金脱すうち、彦右衛門が表れ開るざるよ焦躁つて裏口よ廻りしとも氣のつかず、するりと開けて推出しやまバ突と飛び出る男、闇とあやなし彦右衛門が胸よ衝突るにぞ、不意を打たきて愕然は爲ながら大喝一聲何奴と叫ぶ途端片手で烈しく突き返せ

編後りとなさい

ば、心中十二分は鬼胎を懐ける傳太、何奴と罵られて既迅雷頭上よ
落たる思をなし、尻餅さへもつうんとせしとこるを撞き飛ぶされし
なれば魂魄も身よ添て家の内へ駆けあがる後よりついで躍り込
む彦右衛門が、さてと奸夫と悟るに怒火心頭より發りて勢ひ鋭く追
ひ逼れば、夢ども現ども分らぬ心となつて何の分別もあるでいなし
にお新動轉の餘り板間れ隅ありし骨刺斧をとつて男に廻與せ、此
時遅く彼時早く猿臂を伸ばして領首引握む彦右衛門、絶体絶命斧を
揮りて横に薙ぐ傳太、外大腿さらきて血とさつと迷るに、汝よくも
我を斬りしと怒り一段激して死身あなりし彦右衛門、斧持つ敵れ手
を捻り上げて奪ひ取ふんと揉み合へば、お新はうるく、新太郎と
物音に驚きて泣いたも、行燈と倒るゝ、婆と平日の口喧しきにも似
ず何處の隅に潛み居る始末、一場塚なく亂れて黒闇々たる其中に

編後りとなさい

キヤツと魂消る聲はたしかに傳太郎なり、聞て驚くお新の今さら急
に逃げ出さんとする様子、汝姪婦めと背面より心當り浴せかければ
同じく最後の一聲さて、其儘息を絶するらし。之にも餘怒の治まら
ねを、見すく不義と許したる輕薄婆め覺悟せよと、娘の聲に驚き
て思はせ知らず立ちあがりたる婆も酷く首到ねたり。三人まで斬
り殺して右の手に斧握りしまゝ少時は突立つて、茫然とあり居しが、
思ひつひてや裏口の戸と引き締め、燧箱手さぐりに取り出し火を鎖
らんとして、斧の柄握みし手の指はつれざるゝ驚きしが、又もや聲
絞りてわつと泣き立つ新太郎、ゑゝ八釜しき餓鬼め勝手よ號よと腹
の中で思ひつゝ左りの拳固めて我が右の腕と邪見に打ち、漸く火を
鎖り出し燈を點じて見よと醜態なる家の中、後腦打ち割られて俯し
居るお新、さても氣味のよい死狀なり、婆が首の領よかけて七分ま

できれ居るも愉快にたげ、肩先より乳房のけ胸廓と切り裂くれ、口惜さうな馬鹿面して仰向し倒れ居る傳太が面を見んとする時またく悲鳴をる新太を今と懐中おして左りの手にて泣くあくとたきつけつゝ、右の手に男の髻をもつて燈の下に引きせり行き、見れを何處やらよて見しやうよもあり見ぬやうよもある面つき、やがて其を抛り出して我子の顔をじつと見るが、何やう氣の故か奸夫に似て横面の黒痣さへ癩に障り、壘の上に柿でも置くごとく下は置き、汝とど少時黙々で睨みつければ再呱呱出す、ゑゝ、到底此所よ居られぬ我身、斯うして見ればお新めに我が一生を無茶苦茶おされて仕舞ふたり、淫婦奸夫を斬りしとまた理屈のつくべきうは知らぬと妻を斬りしは罪なぬかれぬ事なぞ、理屈も糸瓜も有つてよとあらせ我面憎さお新めよ此胸を無茶苦茶よされ此一生を無茶苦茶おされて

仕舞ふたる上は面倒ある疑はしい此小兒、これも序に殺して悪人等が脊中につけて遣るべしと拳を矢筈よして仰向き居る新太が咽喉よ推し當てつ、今しも力を入れむとする時、父を知れをや無心に笑ひぬ、今殺されうとするも知らぬで、

第八十二 笑おれて慄然總毛立ちぬ

怒つては何も彼も無くあるが人の常、其時道理の人情のと面倒な手緩い詮議の有るべき筈なければ、無法無敵無遠慮に憎い者を斬り殺して僅に腹なりを癒すものゝ、怒り火炎上し去つて餘燼もやうやく滅えんとするに臨みてと分別も湧き理屈も流れ出し、和しき情の水も噴き溢るゝほど胸に満ち来て、又何も彼も無くなるものなるべし。彦右衛門生れついで身劣あること邪曲なること大の嫌ひなるより自然他の不義を憎む心普通と超えて烈しく、廣島で餘計な手出せしも

編後りとなさい

京都で喧嘩せしり、近頃金四郎を叩へて恨を惹きしり皆其氣性より
招きしあるが、今我家の中の者にて加之充分和しう取り扱ひ、假令
我が氣まづく思ふことあるとも忍びて言ひざるほどに可愛がつて遣
りたる女房の、大うれた不義三昧を見て、悟つて、其上奸夫に刃物
持たせて立向いせられては何堪忍のなるべきや、半分之奸夫の鯨の
骨刺斧を揮ふを見て狂氣になり、一切夢中にて心よく三人を打ち殺
しつせしが、新太郎まで尙憎くて堪へられず、最早色變りて倒れ居
るお新が顔と見くらべての汝とと睨つけ、遂に彼世へ突と行け
と捻り殺さんとせしが、母の死して既歸らぬものとも知らざるか頑
是なく我を見て莞爾と笑ふに、流石手は下し得ず躊躇ひける。され
ど從來思ふ通り何事も遣つて退けたる彦右衛門、あゝ疑としき此小
兒め、此奴も共に此世から追ひ捨て我周囲を乾淨白々とあし呉れん

編後りとなさい

と再度喉に手を當つれば、無惨や我を慰してくるゝると合點しや
うの笑ひ顔、笑おれて慄然寒氣ざし、満身の毛孔より風出るかと疑
がとるゝまで總毛だち、何とも云これぬ心地して剛情の彦右衛門も
思はせ手を留むる時、何時より吹き初めしか知らざりし風の外面の
樹を揺らす聲耳に入り來り、淋しさもひとしや深く感せらるけるが、
思へば一旦の怒りより酷いこと爲たるさへ餘り心よくはあらざり
行き、まして罪なき此兒を殺さんとい如何したる我が過誤なりしか
と翻然と顧みれば、母あし子となりしわこれも忍ばれ、さても不幸
なるものかなと歎息も出で來り、此後これを何とせんと掻き抱いて
思案にくれぬ、

第八十三 後には星の光るのとき

浪ぞうくと磯を打つて沖の白波と暗の中に幽けき光を放ち、遠く

編後りとなさい

鳴く海鷗の聲物悲しく聞ゆる海邊を、新太郎懷中にしあがら二三枚
衣を重ね着して我子寒からぬやう爲し、真夜中過ぎに燈も持たせど
そりく歩む彦右衛門、嗚呼と歎じて星光に新太郎をすかし見な
がら、今死なむとする我に抱かれて悠々と眠り居る心無さよと思ふ
世に墜す涙の露。我一旦の激怒より汝の母も婆も手に掛け、とても現
世も生存へて楽しく暮さむ望絶は果て、人は責めぬを自ら責められ、
一時生れば一時だけ唯苦惱を増すのみあり、他に逢はざるべき顔も無
ければ獨り居るべき家もなく、先刻に汝を殺さんと慘くも思ひ定め
し時と天魔の我身に宿り居りしか汝よりまづ此父が明るい世にの樓
をぬるものとも悟らで淺麻しくも邪見の心に我慢の腕、既に汝れ
咽喉を絞めむと手を掛けかけさりし其而已にても逆も現世に在り有
べき生命と早く盡きたるあらむ、免せお祈を殺したるの我が全く

編後りとなさい

過失なり、殺さざるとも濟むべかりしを我が心をバ矯むること知ら
ざりしおろ口惜けれ、汝れ母を奪ひしは我が恐ろしき罪されど我と
今其恐ろしき罪に責めらる長く世に生残ること叶はせ、耻辱より他
に我を取り巻くものなければ生て甲斐なく、是より身を、此浪荒く
底深き海の藻屑とあしてせめてもの苦惱を味へんとするなれを、
免せよ我を免せよ我を、汝をバ世に残しよきは山々あれど何として
も堪忍出来ぬところあつて我と共に奈落へ連れて行くなきは是は我
おため計るにあらで汝の爲を計ておれバ酷いと我を呼ば呼べ、母
なく父なき孤兒として我が女房さへ我に反く危険き世にと遣し難し、
恨まば恨め我をも恨め汝が母をも恨みにねもへ我女の不義をも見許
すやうなる婆ある世をも恨みにねもへよ、恐ろしき世に父母なき汝を
遣きて、恐ろしき世に汝を任せは、假令ば我みづから汝と弄り殺そこ

とと能くすとも尙かつ出来ず、父が最期の慈悲ぢや愛情ぢや、此思
としい世の中より汝を未練氣なく引き抽きて蒼海の清んだ中に打ち
込み呉るゝと、嗚呼、汝の誕生してより幾度となく笑ひ悦び行末目
出度く榮ねよかしと思ふも夢と樂み居しが、そと水の上の紋より
脆く消えて、初めて今宵と我身の從來居た世界に、榮えたとても夢
のやうなもの悟つた、情ない世よ住まふより死ぬるが眞實に増し
あるぞ、死ぬ、我も死ぬ、汝も死ぬ、汝を生かして置ことと殺すより
尙不憫なれば今も父が身を捨てゝ汝のために殺して遣るをれ、恨
みもあらじ悲苦もあらじ、覺悟せよやと心中に幾外念と練のへし、水
に臨める岩端に我子抱きて死仕度、犢牛の如き大石を帶よつちぎて
腰につけ、齒を切めて聲を出さね力に餘る岩石を岩の端まで引き
上げつ、ほめと一息虹を吐き、いづれまで未練に世に在らんと夜目

に之見ねど豫て知る深さ十尋の餘りもある淵に對て觀念定め、南
無阿彌陀佛も口の内に、ゑいと力を勵まして落せば落る石と共に、百
尺崖下に飛で落ち、後に之星の薄雲に包まれながら光るのみあり

第八十四 刃物ともめて尋ねても来よ

己が思ひに身を責め世と狹めて、詰るとあるの死といふ底無井に飛
び込まん弱くも決定したる彦右衛門は、天地を卑小な根性よ恨
しく思はしく考へ、我身ばうりの何知らぬ新太郎まで伴ひて岩の上
より身を躍らせ浪湧き狂ふ淵に入りしが、天道いまど人を殺さず、
さしも緊乎結びしつもの帯は、死に臨める時れのづゝ心足らで
左迄に牢く結ばざりしや、さんぶと水に入る途端忽ち解けて石と
身は離さく、とちりければ、身は水力に押しあげられ、思はせ浮び
て再度また浮世の風に吹くをし刹那、狼狽愕く其中に心機一轉、ゑ

死ぬまじと思ひし事やら思はずしてやら、我も了らば岸邊をさして潮に採まきり流れながら早くも泳ぎあがりける其間僅に利刀をもめて紙を貫くばりなりしされども屏翳き新太郎は既息絶えて瞑目したるに、先刻は現世を恨みにねもへと云ひゆゑ冥途へ連れ行ひむと眞情よりせし彦右衛門の、今は不思議や左右の論なく、水死の者をも浅度の扱ひなきたる男の事なきは、早くも兩足とめて倒まに引つ立て、水を吐のして早速の活を入れ、息吹き出ると見るよりも我が肌を肌推しめけて、一目散に走りける心の中ぞ不思議ある。顔て我が家の裏口に來るや否や、引き寄せし戸を静に推し開け、人に知らまぬ用意細く、黠したるまゝ捨て行きし燈火のいまだ消えやぶき、朦朧として尙残れるに我子の顔をつくぐ見れば弱りてある居れ大事は無し、急ぎて衣を着替させ、充分手あてに油断なく、其後

自己も衣着替へ、手あらく婆の死骸を起して濡れし我衣に緊しく包み、細幾條とあくあけて蕙も怖れを背後に負ひ、尙幾條の繩を腰にし、泣く新太郎を賺しあがら悠々として此度の夜もやゝ明々んとする頃に前刻我身を投じさる岩のあたりに復た來り、四方に鋭き眼を配りて、婆の死骸を大石に骨挫ぐるはと殿しく縛し、其儘海に蹴轉し捨て、水音きいて空を仰ぎ、光り漸く薄れ行く明星あがめて時を考へ、一語も發せぬ寂然と唯冷やめに眼を定て何を笑ふの笑めたる風情を見せる兩の頬、そとと了らるを泣くべき新太郎の濱邊の草に捨て置られしを、怒ろし彦右衛門立歸りてまた懷中に挿き抱きゆゑ足を早め、浦曲傳ひに四五丁歩み、沙平のに遠くして人家も疎にある所へ來り、陸に上げある小船の上に我子を下ろして胴の間の劃りの横木に縛りつけ、力に任せ船を動し、漸く水に浮かせし後、舳先を

握みて少時の是が親子の別れのと胸に別離を悲しむ、時移りて汝が爲らる此潮に乗り風出ぬ中、天れ命をるとまろに行け、落着く先づ儘に某所と我と離れど中途にて如何あり行くのと我が智に及ばせ、行け、汝の運の汝に在り生長なさば汝の勝手、汝が母殺せし我を恨まば刃物を持って尋ねても来よ、汝を助けし我を知るとも報を我は求めぬぞよ、天道まのせ汝任せ、如何なとあらばなめて亡せよと、烈しく沖に突き出せば潮に取られて流れ行く船は水煙茫々の中に隠れて見ぬなるを見送めて後少時は泣きしが涙を拂ひて我が頭を力に任して打ちたゝき、痛み心之苦惱を紛ふし、飛ぶが如くに馳せ歩んで再度小舟を奪ひとり、際涯も知らぬ大海を怖るゝ氣もなく漕ぎ行きぬ

第八十五 此生命浪りに捨らるべきや

我最早此日本には居り難し、假令他より何とも云ひきせ姑殺しの罪之發露れども、我心の其を知り居れば、幾多人に恬然と顔を合せ平氣で居らむこと耻のしくして堪ふべきにあらせ、さりて淺薄にも麥を蒔いて稗の實らせ米を煮て砂とひなぶる世を恨み憤り、身の置きどころなきまゝに黒闇の界に躍り込て終らむと不所存の頂上と氣がゆいて見れを決して再度自殺は企てじ、詮せるとまろの少時我みづるを耻を忍び苦惱に堪へ、苦惱の有らむ限り皆めつぐし耻辱の有らむ限り受けめくし、悪報の盡くるを待りて復び現世に立ち歸らん覺悟定むべきのみ、何條自ら過失をしたる上に其過失に自ら死ぬべき、云いお新がために我我が過失を爲せられしに加之其過失のためまた自ら死なむ憎きお新は彦右衛門首を與めたるも同然、馬鹿々々しさよも程のあるまじ、死神に取りつゝのをたのめ知ら

ねと世を厭ひて水に入た後夢の覺めふやうにありて思へば我ながら
呆れはめる無分別、何して此生命浪りに捨てらるべき、我が罪なん
どに我身を食れて果敢なく死で堪るべきや、罪よ死ぬとは今さら願
みまば卑怯至極、罪と殺して帳消としてこそ我も男兒なれ、臨末ば
ありの事は何でもよし唯是より他に知れぬ我が罪の我が胸中に
あるものを次第々々消し行くべきのみ、え、五年十年の苦惱何程
のまどあらむや、此心他を欺くとも自ら誓めて欺るを何時の罪
の苦惱も消えて果てせん時あるべし、さして行くべたの無けきと
何處の浦の曲になり此身を舍きて少時潛み、我が一心を善に向はし、
せめての罪の償ひにあるべきほどの事仕出來し、其後再度知る人に
も顔合とせんと勇々しくも浮世の波も身は取らまを、舟押しきりて
壹岐を當に願がせ急をせ漕ぎ行きしに、大膽不敵の男あり。天も餘

りよ大膽ある彦右衛門をば憎みしやふ東より吹く風や増し來て、
楫もかくして沖中に浮べる舟を容赦なく西へ西へと吹き飛せば、斯
くての叶のじと船を操れども其甲斐なく其日のいまだ暮さざる間よ
三十里餘も流さまで五島と對馬の間をと思へる、沖に漂泊ひたり
第八十六 常闇の世に入りし我が身あり
肥前名古屋より魚釣山手前まで十五里にして半日で行くべく平戸よ
りも同く十五里あり過ぎざる壹岐の國へ、無造作に着るむとれもひ
悔りし彦右衛門、風に逢ひて小舟をさば倒らき意に任せ、西へと
のみ流さく、その間よ日と朝鮮の方に沈みて浪や荒くあり行き、
夜に入りて一天墨の如く、船端に潮の光る他にの光といふものあ
く、未明よりして食の飲まをすれば剛氣の男も少し萎み、力も精
も無くなり果て、まよ今のは是非あし天命まらせと胴の間に箕の如

く坐り込み、此儘死を一切無益あり、ゑ、智慧も分別も役もたゝぬが人の世のと無然とありて空打ち仰ぐ折しも骸のやうに面を撲つて痛き大粒の雨ばかりと降り来るにぞ、愈々望のあかまつたり、観念して此身の落着を見るべありと身動きもせ居るほどあつたれ、雨は瀧の如くに下し来て風ひとし烈しく、涙も狂へば木葉の如く舟くるく廻り漂ひ今にも破れん今にも沈まんとする途端、眞黒の虚空は何物の閃めき光りしものあるやうなれば、彦右衛門は空を振り仰向けば眼瞼唇痛きはどの雨ばかり酷く澆ぎの入りて、空と空とも云へぬ黒さ、さても恐ろしい雨、京都の井桁屋駈け出せし時、逢ひたる雨のやうな思ふが早き船底たゞく浪の聲の庄兵衛が聲して、汝彦右衛門逃さべきといふ、耳廓を吹死て音さるる風は俊が聲音して、妾の果敢るく斬り殺されしよ妾振りすて何所

へ行かうや情無き男め暗き世に伴とでいと叫びいだす、さそがに此いと打驚き、何をと大喝する時水の面にちゞくと篝火起りて、汝のためには浅獄くも刃より入りて恨を呑み常闇の世に入し妾が汝を伴れよ来りしぞやと艦の方で確に云ふ、振りあへり見れを青白き三尺のりの人影朦朧と浪に沈みて、螢のやうな燐火且竹消ぬ且つ燃ゆるよ、奇怪至極と罵り憤り、權ふりあげて水を打て何とぞ知らせ白き手をいだして權をつらむものあり

第八十七 我を殺とも活とも我が一念

難風よ逢ひ激浪に揉まきしよとも幾度ありしが、怪異よつゝのさる経験はあく、魔魅とと人の虚言とのと思ひ居しよ現然として船先に艦に怪しき光の見ゆ、思ひも寄らぬ人の姿の顯れ出でしに、流石の彦右衛門も慄然とはせしが、權を力お任せて奪ひとりしまゝ突立

編後りと なさ い

上つて四方を睨めば、唯陰々たる眞の闇、潮の香ばり胸に逼つて
是と怪しむべきことも無し、系業腹なり我心迷ひし故に怪異を見
しか、従来ゆいぞ此様な意久地のなきことなかりしに、何程安心立
命の地の定まらば頼となき身を救けバとして、腑甲斐なくも幽鬼に憐
まざるよとは、彦右衛門も墮落を極めたり、無念千萬心外至極、お
俊が事は打絶えて思ひも出さうりけるが、今更胸に浮び來れば空恐
ろしき我罪業、其過失の因縁のめぐりくつて報い來しが我が妻お新
の身を假りて我に苦惱を蒙らせしかと疑はるゝほど、畏懼の念の心
の底に湧き上がるを我と自から壓伏難し、されバとて既過ぎさるこ
とを幾度輪廻の回るやうに繰返しさりとして益もなし又取り戻しもな
らば、所詮は萬事を且く放下し思ふこと皆打ち捨て、此後を何とも
あそべきのみ、いでや我彦右衛門を殺すも活とも我が一念なれば疲

編後りと なさ い

れさりとも勤め剛ぞむ、天に任そといふやうなる身を棄て鉢の考へ
を持ってばこゝろ慮に付け入られて我が妄念に我をづららぐ苦めらるるを、
一旦生きむと決定したる上は他迄生きむと働かではあるべきかと、
再度勇氣を奮り起し、骨は挫けて折れもせよ筋は麻れて縮ともなき
と身の堪ふるだけ根限り阿迦を掻き出し船を押し切り、とても事
に潮に従ひ風に従ひ今は朝鮮地方になり漕ぎ着けむとぞ骨折りける
が、夜いさく更けて風やゝ和ぎ浪穏あなる頃には心身ともに疲
果て、雨の休しに氣も緩みてや我を忘れて胸の間の船張りに身を
寄せかけつ、息をやすめし其儘に死したる如く睡りけり

第八十八

厨聲もさせ老睡りける

船底岩石に觸つて、凄夢忽然と破き、彦右衛門眼を開けば何國も異
らぬ天の色蒼々と日ざし美はしく、全で生き變りしやうの心地ぞる

編後りと なさ い

お勇氣つきて身を起さむとすきど、飢お疲勞お心勞お六尺の身体生
海風の如くなつて立りこどさへ叶はせ、漸く這ふ如くして身を起し
辛も四方を見渡せを、此地は體お朝鮮なるべし、風景自然眼に馴れ
ぬ有様、黄沙の磯遠く續きて形も異様なる小舟なご陸お引き揚げあ
り、廻て様めづらしき茅屋の前後お丈矮き樹木の隠顯するも面白く、
今しも漁師なるべし一人の男小舟を懸ひ此方へ向りて漕ぎ出せしが
彦右衛門を見付て船の水寄を此方お向け、棹つゝぱりて漸々近づけ
来るおど此方も嬉々悦びて手を挙げ招く容態をすまば、顔て先方よ
り漕ぎつけ来て少時は船の中を伺ひ彦右衛門が顔さしのぞき、遂お
何事お分らぬ談話仕掛くを固より運せねば此方は手真似で憐みを
乞ふをかり、つくづく彼男を見るお淺黄の色さへ定かならぬ盪さき
衣の寬き筒袖なるを着て、小さき腰袋様のものをつけさる年齢四十

編後りと なさ い

七八の中爺なり。大凡は手まねに此方の思はくを會得せしやう此方
の纜を自己が船よつなぎて岸おむかひ棹さま行き、到着の上親切お
も脊負ふて呉れて小屋お摺ぎ込めば、其所に若い男中婆など居り
何事か叫き合ふて粥を煮て呉れ魚を炙りて呉るよもぞ辭せずえて充
分食ひ、やゝ氣丈夫になりしかを家を出づる時有りさけ搔き集め來
ま金の中より一分銀一つ取り出さ、禮心として彼等に與へり、又も
手真似で臥床をもとめ、何は扱置き目前第一お睡りを食ばり、悠悠々
と假り着のまゝお打ち臥しけるが、一時經つても起きばころ、二時
過ぎても覺めばこそ、鼾聲もさせぬ睡りける、其間に何處へか走り
行きま若い男の、年お七十越ぬさるべき白髮爺の鹿爪ふし死を連
來り、枕元お立ち何事お評議しはじめぬ

第八十九 世は愛情の光も明るし

編後りと なさ い

世は塞翁の馬なりとも、馬はもとより虚空に跳ねば、吉凶敢て因由なく來らむや、禍福は料へる細の如くなるべきも細は定まる理ありて成る、豈にさづらふ慶殃の生むべけむや、さきば心海浪なく情火炎を上げざる時程叔子が所謂一盃の清静水の如く我意のなるならば、湛然さるところに物影鑑むべきと同しく過去の経歴れのづかす判明して、其所に吉凶禍福の來去せよ所以も了り、隱約の中天理働く至妙の象をも臆氣ながす視見得て、怖畏をも曉解も生むるなるべし、彦右衛門何も彼も忘れりて、熱睡せよもの、眞夜中頃に漸く眼覺めて、四圍を見まば寂々冥々、家内の者皆寢静まつて鼠の騒ぐ音をかり、幽に残る燈火の光りの水の如くして何所ともなく生むる寒氣肌を犯え、つくづく昨日一昨日を思ふふつれて好い心持は少きもせせ、過往方やら行末やふみ車輪の如く心廻りて、そもく下田を

編後りと なさ い

出まよる今夢まだなれもはざりし朝鮮にまで漂泊來しを、觀せれば二十年餘は空中の鳥の如く世を飛び過せしに等しく、笑ひま事も泣きま事も口惜がましも腹立ちしも皆煙と消ぬ雲と散じ、喜怒哀樂は行く水も色を點まよより果敢なくなせ、残るは此身と耻辱ばかり。嗚呼世れ中をさまじひよ渡ることもなく、唯一人深山の奥の草屋よ、朝は鳥小雀と共に起き夕は牛狗兒と共に睡り、泉は臨んでは静な茶を煎る水も汲と野を歩きてと徐に片栗蕨蘇れ根かんを掘り、八釜しく面倒なる人達と交はることなく、鄙劣き奴等と口利くことなく、悠々として白雲軒端を籠むるところよ坐し、心よ浮ぶよまをし事を峯の木れ葉を吹き奪り行く其木枯しよ打ち任せ捨て、晴の日は柴の扉の外よ出て平等無私の日の光を脊に受けあがす鉄把り鋤把り、雨の夜と笹葺れ屋を我がさめの金殿玉樓となして圍爐裏よ鹿柴を打ち

編後りとなさい

込みつ、温灰よ芋燻く不世の業を僅よ樂みと去、眼よ青山紅花のは
かを見ず耳よ流泉落葉の音のほかを聞かざるやうの生活様して此齡
まであまなならば、罪も爲らば恨も結ばせかゝる、異郷に心細き漂
泊人ともあらずして、葉蒲團よも好き夢と見るべしもの情無や、
年々だ若き時の無暗よ早まど去勢より到着すべき前途も定めど、脱
け參りせ去が過失の第一、それよ身は浮き萍の根を絶ねて、誘ふ
水よ寄る邊まかせし身体、柳の辻に廣島お生月まで来て尙といまら
せ、嗚呼行く末も如是なれば、恐ろしき世を経るも憂去中々お我が
心よも任せざる身の、他の不義に怒らせられては自ら苦しむ、他の
親切おはだされては志をも屈し、好きおつけ又悪しきにつけ何かの
物に常助かされ、ひとま立ち行く事出来ど、獨り来て獨りで歸る道
あれば餘計お世話の要らぬといふやうに行かぬ世の中なれば、いつ

編後りとなさい

ろの事よ世の中を捨て、仕舞ひふさやうな氣持もそれど、ろよと餘
りに残念あり、背後を見せて逃げ走らむよと飽迄世間と戦めて勝つ
る負くるる知らざるぞ我が智慧あらむ限を分別あらむ限を働らむと
と決定しながら、つい往時を顧みむ心何時も自分お思ひ外のこと
ばありして望みも掛けぬ果報を握む危さよ、勇氣も挫け膽も縮み、
應病神の襟元より逃げよ逃げよといふやうな心が出るが心外なま、
明日よりの扱如何にせん明後日よりの如何よせん、明日明後日へと
もかくも、ろも我後事を如何にせん、何のやうな事爲し得て後何の
やうな態よ我の死ぬべき、何を目的に我日を送らむ、臨機應變明日
と明日よと眼前をかまを珍重なし、今日面白く暮さいでは一生の中
に復今日が日おあるまいと亂暴な日の送りやう酔ふて騒いで寐て仕
舞しまともありしが今ねもへば餘りよ馬鹿々々しき振舞、自分と若

編後りとなきい

い威勢で睨したよ過ないとは儘よ自分が證人に立つて云ひ張れるほど、嗚呼考へるは考ふるほど気がくさくして爽快した男兒と他にも云はれ自分でもおもふて居た此彦右衛門が病人か女子れやうなる哩、るゝ如何して好んもれやう分らぬ分らぬ痼癩の起る、迷ひ出る、腹も立つ、業も煮ゆる、情無くもある、脱参りといふこと流る、行つたが我に罪を作らせた發端である、京都大阪を好いものゝやう云ふた奴等が我と煽つて苦惱れ多い世界に躍り出させたではある、井桁屋は亭主庄兵衛めは蕩樂が我と魔道を入れたではある、お俊めが悪魔である、ろきより廣島は銀次生月は金四みお我を無理に意地張りれなまじひお俠客くさくした奴等ではある、親切お一生我を可愛おつて呉れた權左衛門殿を恨むでいおけをど其酷く剛氣お行状までが我を影から助けてお新が婆まで斬り殺すに躊躇はぬやう爲せ

編後りとなきい

たではある、友達甲斐は充分あつて我も可愛うおもふよ茂助さへ到底は我お恐ろしい事とする種子を蒔いた男ではある、權左衛門殿死さふれた折大抵の奴等が輕薄お性根を見せたも到底我を一言半句れ問ひ糺しさへなく婆まで殺すやうさせた一つれ種子に違ひなぬ、今まで一年々々覺えて來たおとは人は虚言つきぢや悪者ぢや偽者ぢやとゆふ事あり、ろれ等お我を無慈悲無人情は悪者にしてお新等三人と打ち殺したとゆふが最期の破裂、ろき等が鄙小お奴等を手酷く扱つても構はぬとゆふやうな恐ろしい根性よ我を仕込んで始殺しの大罪まで爲せたに違ひなぬ、と云つて自分を被匿ふでい無けれど世間のお蔭で苦惱を受くるやうなつた、自己を恨む次に世間が恨めしい、顔を覺えれたほどれ人間に殘らぬ我を幾許かづゝ悪人にしなに違ひさひ、出て來て見よれば俊の亡靈め、出よく庄兵衛お新好

夫惡婆めらの亡靈め、此方で汝等お云ひたれ恨みがある哩、出て見よ亡者どもと、半分之心錯亂つて腕をとり絞る半夜れ述懐、亡者共が彼世で夢に歴さを居るべし。

夜明けく白鬚の老夫また來り、彦右衛門が眼覺めざるを幸ひよ、種々の事問ひかけるは日本語あり。渡りに舟と悦んで此方へ引き繕ひ答ふまば、漁師の漂流とれもひかして親切お取り扱ひくるゝにぞ厚く禮して二三日の其まゝ在りけるが、言葉通ざるまゝ段々聞けた、嗚呼世は情愛の光りよ明るし、彼れ白鬚の老父三十ばかりある時五島の姫島お漂流して半年は餘といま居しより、いまだに其時受けたる親切を忘まき、此所熊川お流れつゝいたる日本人を往時の我身に引き較べ、取り分け和しく怨に我恩報じれ心にて世話やくとふ仔細るまけり

第九十 我事を忘るまば舊の彦右衛門なり

爲すことも無くして熊川よといまる廿日を越ねたる其間、或曉と竹林の外よ東天紅を唱ふ鶏の聲聞いて故郷あつかしさに徐既往の我が行状を悔む、或夜は壁外に物悲ましく鳴く蟋蟀の吟に寐覺の寂しさを覺て獨り行末の心細きを感じ、酒にも茶も恨然として歎じ戚然として愁ひ、我より外の人には知らざる悲惨の境に沈とし彦右衛門、身いやゝ舊よ復せしも心の半死の病に惱めること久まかりしが、何と決断せしことやら、遂に日頃の世話介抱を家の主人より厚く謝し、相当よりも尙豊ある謝金を遺して、獨り立ち出で、教へられぬ道辿り、遠くもあらぬ釜山に行きけるが、此地は港のことゝ少しは賑やりに、名も豫て聞た知つたるところあれば自然心だのもしくもおもわれ、何といふこともなく市街を歩きけるに、前面より來か

編後りとなさい

ゝるは珍らしや我が國人なり、生月を出しより、日數の多く経ねど、種々の憂き目辛き目にも遇ひ悲し死思ひ苦し死思ひをもあしたれば、一日を三年の如く想ひて、一月お足ふぬ間も既幾干々年老たる心地のせふれしふ、今しも戀しどおもへる我が國人に邂逅ひて、假令バ怨敵ありとも何と云葉うけず居るべき、周章ふためき行き進ひさまに聲をうくまば、先方おくも言語異ひ風俗たがへる異國ふて同じ手爾葉用ふ者お遇ひしを悦べるおや面を和らげて挨拶慇懃に、己が名を告げ此地へ渡れる仔細を語りけるを、聞けば其男は對州嚴ヶ原れものよく、主人と頼める長崎に藥種問屋鄭徳丸れ用を帯び、一年一度二年一度、三年ついで渡韓らぬといふことは無きはせよ數次此地へ來く、公然れことではあければ藥種を仕入を持ち歸ふとをあし、砂れ多い朝鮮米も食ひ馴れたる苦勞人のよし。彦右衛

編後りとなさい

門は我が身れこと好い加減に語り知し、萬事不知案内れ土地おれバ宜敷手引と頼みて、歸るにも何卒好き便を得んとおもへば、頼りと其男に頼み入るに、爽快れ男よて少しも辭まらず、心得ありと承諾呉れつ、二三日同宿せる後、いよ／＼是より對州へ一旦渡りて、そまより長崎へ歸るなまば、共に此船おど、誘引くるゝにぞ、喜びて同船あし、海上風波れ難にも逢はず嚴ヶ原に着きぬ。日光の不徳れ奴が頭をも照らし花香と有罪の男の袖おも蒸きど、暗雲胸間もあれバ慈日れ光りを蒙むるよしあく、悪氣肚裏に潜めば妙花れ香を聞くことと得ず、彦右衛門天地れ慘澹るるを認めく光明汪洋たる宇宙に逍遙しあははず、一念常に両頭に分れ心緒亂きと絲の如くなり行き、昨日右よ定めし考へも今朝左よ變ずるを免れぬ、我よも我れ任せせありて心と飄蓬身の浮塵、對州よ着きてよりも思考

と幾度の變りく、是より直に剃髮染衣に身とならむとも迷ひ、
寧のことに兇暴放肆一生を酒色の間に捨果んるとも迷ひ、悲しと深
き夜すがらはつくく、我身の存るを惡みて、以て明日よりは食を絶
ち餓えて死なむと覺悟する時もありしが、流石も其も爲し兼ねく一
日二日、三日と送りけるあ、長崎へ明日の行くべと定まりし其夜
不圖聞きこみしと、其と同時に壹岐に國へは出船ありといふこと。
壹岐の郷に浦に、恩に着るでとあけきと恩をのけたる者れあり
て、兎にも角にも其人を頼まんと生月を出し時をたもひしなまば、
目的は無き長崎へ行ひよりの、其所に赴くばまふ好き相談に遊
て我身の振り方定まらむも知れど、然なりく壹岐に行くに若
ぞと、煙を離れくうあんどの様も力無くも思ひ定め、道連と頼み
し男を振り捨て、獨り壹岐の國へは便船に乗つて郷浦に至り、目ざ

を男を訪ひ尋せば、二間間口は店こそ張り居れ貨物少く寂しげなる
荒物屋にて店頭は坐り居る四十前後の女の、顔黄色く涅齒削け加之
油氣なき髪は毛斑白なるあ、主人はと問へば、何所ら來らましく
知らねと二月越しの病氣で臥て居りますと情なれ挨拶、船に乗
つて梶折つやうな氣持はすれど、遠慮ないものあまばと道理いふ
て案内させ打通り見れば、店よりも尙可憫なる奥の有様、煙け障子
お穴多く、疊も糸の見ゆるまで破れさる部屋れ中も、煎餅ごとさ蒲
團一ッ敷きて其上に叩き苦し居る主人、我事よと差し詰り悲し
くればねて彼女も仔細と糺せば、固より遺縁をかりで保つたる家の、
主人病氣も横になつてより一切埒なく、薬用は手當さへ今は届りぬ
まで困窮き其日を送りやうと、聞くと見捨難く、懐中の財幾許の與
つと、殆ど夢中ある病人を恤り介抱せ、何にせよ此儘おと置られせ。

我尙何よのしく遣らむほどに醫師を呼び迎へよ、よし、地名さへ聞
けバ尋ねて分るべし、我行さく迎へ來むと、我が知己は病も我が事
は少時忘れて、其忘れたる間は舊れ彦右衛門も異らず愉快氣も言語
舉止をあしける

第九十一 顔色を變く涙ぐんだの

たましく他郷に故人を尋ね得ざる悦びはありあがら、逢ふて見れば
頼む甲斐なき大病、彦右衛門落膽のしさを却つて此に自己が事
を少時胸より奪とれしまし、快く親切お介抱しく、一日二日を送りし
が、女房ども下婢ともつかざる智慧足らぬ女を遣しく男の遂は病死。
葬禮も済まぬ今更此所を去つて行くことも難く、勝手を察すまば、
野邊の送りも出來かぬる仕誼あるに、情無く別れ退んも心ならず、
已むを得ざれば乗りかゝつと舟とあきらめて、棺を買ふやら線香供

ふるまで皆我が懐中から仕て遣り、戒名賣るを商法にする僧徒も
嬉まがるもの握りせく先は一ト通りは葬式と濟し與りけるが、事情
のゝる場合に何日まで居るとして徒らに我が肉を食ふて仕舞ふばあり
あまば、初七日過ぎて少許の錢を後遺りし女お惡み、獨り飄然と
指す方も無く立ち去ると其心構へをあし、せめての亡き人よ名残
は香花たむけんと殊勝も慈參を思ひつき、身よ引き較べ無常を觀
念ながら寺詣詣しよ、些少なりと善根を爲すべきもの哉、冥界より
報恩のためとて亡者の引き逢せしでも云ふべき歎寺は門際の小家
よて横買ふ途端つと迷ひしは生月の松富の隠居様なり。是はと
先方でも驚きさるが此方の尙の事、身に暗い覺えあれバ呀と云ふま
ゝ足を廻して一目散に我知らず逃げ出を、追留めよと急下す指
揮うけて疾風如く走り來れる僕の早くも追いつき、袖を押へて放

さばこそ、放せ、待ての争ひの中よ、杖と共に三本足おありて息せき駈け来らるゝ隠居様は姿近くあり、丸頭巾の風よ回みて醜き態とみれるも厭之甚、これくくと皺枯れたる聲出されながら追ひすぶらるゝを見ては今更没義道お駈け走り難くもあり、何とも彼とも名づけられぬ心地のして、其儘其所よづくくど紙袋の中の風抜けて萎びるごとく身を屈め躡まり居れば、隠居と従僕よ對ひ、其方の用なけきバ宿に歸り居よ、追付我も歸るべし、心配に及ばず早歸れどの命令。多分秘密の話しのあるあらむと従僕も合點ぞ、左様あらば御免蒙りて一足御先にまゐりますと何れへ歸り行く後影見送り、初めて彦右衛門と名を呼ばるゝ何日の間にか自分も知らぬお戻り居し眼を開いて仰ぎ見れば、別段怖い顔も爲されまして例の通り物柔しく。汝の誰の墓参りを爲うとて彼所へ来合せまう、生月に汝の

影の見ぬおななりくより一月はせしか経ぬお斯る土地に來り居て墓参りとの餘り不思議お事よの、不思議など其ばかりで無く、生月にては汝の見ぬおななりしバありう一家残らぬ皆無となり、さつぱり理由の分らぬ騒ぎ、おわゑも角も此所で詳しい話しはならぬ一緒に來よと、まゝ寺に取つて返し、我が香花手向くると是の無縁墓ぢや、是れ此國に三ヶ所ある我が漁場の者等の或は沖で浪に取られ或は怪我で没くなまじしを供養するにめ建立しな塔ぢや、春秋二度お追善願經するやう和尚にも頼み置き、まゝ我が此地へ渡る度毎にの必此寺よ立寄り、呼我が家の營業のなめ死んで呉まゝ亡靈等ぢやとおもへば、數珠繰つて稱名して猶充分よ回向のむ附届けをして行くのぢや、汝も手助けよと、立派ある塔を指さしての物語り。まゝ、死んでまで此様よ慈悲深う爲て下さる御主人様のまゝ世よあるべき

やど、生月も此様な搭の左る寺に在ることを豫て知り居られど今
又特は新しう感せられて、閑伽を汲み花を供し、共は念佛幾返唱へ
けるが、隠居敷珠を懐中納め了り。さて彦右衛門汝の参りよ來よ
墓と何ぢや、其墓此箇と指さして我を見せるは憚りあいつどの問ひ。
不思議と思ひながら尋きつれて、新しき標の杭を見すれば、俗名
清左衛門と讀て少しも解せぬ顔付の隠居、やがて。何あせよ座敷
に通る閑静あるところにて種々話しも聞きさしと彦右衛門を伴ひ、
和向の對面して用濟みし後、客室少時借りて煙草一二服の末、極々
聲を低め頭を寄せ合ひ。さて彦右衛門汝に尋ぬることのある、我は
總て汝の爲をおもふて云のぢやほどに決まて悪う取つて早まつと怒
りなど起すまいぞ、善うれ悪かき云とい汝と主従の中で汝を悪うは
仕さくない我の了簡を能く開分て、問ふこと少しも隠さず正直よ云

ふと呉りやれよ、よしかの、汝が姿の見なくなつた後、彦右衛門が
居なくなつたの否城下へ遊びお行のぢやると一人二人の云ふて
居るが、其中茂助が色を變へて飛んで來て、彦が家の何しよもの
人一人居りませぬ様子、唯事でのござませぬとの報知に讀みかけ
て居る眞田三代記の幸村が高野山を出るところの面白さも打ち捨く、
急いで茂助を従ふ二人きりで、幸福よあ、二人きりで、行つて見よ
をバ亂暴狼藉、何も盜賊の體に入つた見ぬ紛失物も大分らしと茂
助の評、それにしくも一家皆見ぬとは餘り不思議と、さあ不思議
を立るまでもなく知れよと、疊は血の痕、鯨の骨刺斧は凄い色に
光つと臺所口に轉がり居るではないか、よれ彦よ、顔色を變へく涙
ぐんだの、よし、大抵了つた、汝が制敗しよのぢやあ、仔細に定
めし有らうければ何故それなすばるれで我に私と告げなつた、

幾年か能く働いと呉さ汝達の爲を思はぬやうな老父と我を見くびつ
さかやん、それやうな鄙劣さまた老父で何百人の荒くれ男を生月お
も此島にも使ひ役つと恐ろしい營業と爲ながら松富他家を長く續い
で来られさもれとおもふか、泣くな、泣いと哭きまとも可いと、今
は梅干老父でもまだ人殺しの二人三人して兇狀持つさ男とさへ、我
を頼むとあれば瘦せ腕の下に隠匿つと與る根性骨を持つて居るは、
逃げさり隠れさり狭小さことを仕ないで何故我に相談をかけなか
つさ、若し身体を持ちながら餘り意久地のな奴め、時節でも無い
よ此島へよぼくしと身体を持ちながら此老父が飄然と来さ何の
さめと思ふ、見所あつと網戸をひじめ四番五番までの羽指おしと置
くもの、我子も同然、大切の營業の長を爲せて置くものを粗略にな
んど、思ふやうな汚い根性を持つて居ぬぞ、汝の居なくあつさ丁度

其頃二艘の小舟が甲所乙所で失せさ噂、其場所と潮合を考へて一ツ
の地方一ツと壹岐と悟つさば、彼日の暴風雨に朝鮮地方へ流され
さかともれもひながら、汝が一家はたいの逐電の体につくろひ置き、
我は此地へ、我子同然に大切にねもふと居る汝の生死捜りに來く、
萬一うろついて居たら引捕へく、もちつと根性を圖太く持くと異見
して呉れうと祈つて居たは、汝の茂助を何所よ居るとねもふか知ら
ぬが肥前地方を我の命令で親身の兄でも捜すやうに尋ね回つて居る
ぞよ、ええ見とも無い、男兒の癖に泣な

第九十二 好い

軀の瘦せて雪よ立てる老梅の如くも言葉の花ふと意氣地ある隠居の
長物語と、聞けば嬉しいやら心強くなるやら、思お感じて男泣
よ泣ける彦右衛門、膝よ置いたる両の拳を握りつめて返辭も無く頭

を垂き居しが、粉飾の抜けたる男児の眞情ふ心を動かしされて、我が身も魂魄も要ふまじき、善の悪の好みの悪いのといふ面倒なものも、關ふ暇なくあつて拳固は涙を拂ひながら身体を前より揺り出し。謝罪ます謝罪ます、彦めが悪うござりました、それはござりませぬと思ふて下さるものとも知れず無言つて生月を出たは重々済まぬこと、今彦右衛門が此身体生死ともに御任せ申します、如何なりと爲て下され、何んの能もない身体で生月よ来てよりといふもの別段仕出しのことさへ無死お段々と取り立てられし上、御老体も厭はせざる態々此島まで渡りきて此奴れたため好むととの御心配ひ、何した縁が前の世よ結ばせあつて死より入つた我等を其様に御親切と思ふて下さるう知りませぬが世界の人の皆彦めを黒闇お突き墮と仇敵のやうよしり考へらば我身さへ我が仇敵のとまで疑ふべきの不幸よ沈んだ我を、

眞實の子なりとも愛想盡くささるべき所行したにも關はせ御慈愛深い思し召をうけて下さると、あまりといへば勿体なく、不思議の立ちくらの有難くて、泣くると仰やつても胸先うら涙が突き上つて溢れまする、眞實を白状のしますれば今までも御慈悲深い結構な御主人様との寐た間も思ふて居りましたが如是ほどの御情愛を見るかげもあゝ我等に對りて持つて居らるゝとぞ存じ寄らるゝつたが我が根性の裏見にて御耻らしうもござります、又済まぬ事でござりました、性來が馬鹿を奴故と勘辨して遣つて下さりませ、もう是くらの骨が舍利よなつても肉が泥にあつても、御隠居様、御隠居様、彦右衛門の御前様の家の廂の下で無うての死おませぬ、御眼は光りの届ぬ土地に走り出そやうなことの此舌が即坐に凍ることのあれ決して爲ませぬ、狗になり馬になり爲て一生お使役下ささましと眞心

編後りとなきい

こめて云ひ出れば隠居の眼を正しくして、搦げし頭を見詰むるばかり、
稍少時して彦右衛門の、生月出し仔細より難風に逢ひて朝鮮に漂着
しこと、對州より壹岐に來りしこと、頼まんとせよ男の病死せしこ
とあど一々語り果てけるに、聞き終りて隠居ははくく笑ひ。天晴
柔しい情をもつてゐる男うな、苦勞の相應ふまゝ來ても未だ世の鹽
も砂糖も餘計嘗めぬだけあつて考慮が微弱ゆゑ、汝の知るまいが彼
死んだ權左衛門などの親父の妾の奸通見露のまゝ自分の頭上より振
りつた事でも無いに修羅を燃や去、犬うなんぞ殺すやうに打殺し
たが二十何歳の時、それより家を走り出く一生をまゝ安樂に送つ
了つたと、汝が汚穢の動物二三正殺また之當然の事、少も苦みす
るよとあたらぬ、誰か聞かしたとて汝が道理と云ふであらう、ハ
、、何な仔細のおもへば何でも無いこと、惜まいことに小兒と

編後りとなきい

棄てるともであつたを、それも疑がとしく思つたをば棄てたも却つ
て好むつたの知れぬ、苦みそるも苦にするる生月一局の先づ我が何
とでも出来る、決して汝が其事で再度心を悩そこと無んやうと計ふ
ふて置くべき、斯うせよ、此島に此儘残して我の漁場の一ツを預
つて呉れ、何の、世に際涯なく長いものぢや、氣をゆるりと持つて
終局の善人とならうと心がけて居れば、善人よもなれぬ中自分ら
悪人になり了せて死んで仕舞ふんさ、汝の所行も好かつたので勿論
無いが其儘突死つめた見と出すとの詰ふぬ話、丁度泳ぎの出來
ぬ奴が真直に立てば首の出るほどの水に落ちて周章て悶々願ぐた
めに生命失ふと同然やうな理屈で無ん、氣を静めてのろりと世
間の渡るがよぬぞや、小瀬な講釋をするやうぢやが自己も覺えがあ
つて一旦の死なうか生やうあの境にも踏み込んだが、其時或武士に

助けられて丁度今我が云ふたやうなまを云ひきかされ、成程と氣がついた其後の、自分でも少くも太そぎるとれもふほど腹を潤くまで臆病者のやうに意は注けながら悪人と見ゆるほど大膽な年月を経て来た何十年、何やら今は夢見も悪うの無く、其日々々の空の光を有難う楽しんで行かるとやうなつて来た、悪い分別のつけぬ、最少も堪忍と云ふことをえて自分の苦惱に耐へ、悪業の報を果えて善根の種を蒔け、雨ばり降り降つて居る月も無ければ寒くばりある歳も無い、見やれ弱草が自己が弱いために早く腐つて剛情な樹が遂に花も開き實も結び天晴大木となつて死んでも棟木とあるのではない、自分で仕出した事に羨むで退くやうな事あらば何日往生が出来るものぞ、さ、會得がなつたか彦右衛門、踏々眼々とするな、確乎とせよ、うるつくを、やい、ゑい弱蟲め、まぶ迷つて居るの白痴め、

老人の舌よども汝が根性の意氣地が無いか、返答出ぬの氣が抜けた歟、此木像めと一聲烈しく、立ち上りさま突き倒せを、突き倒されて根の無い木のやうな腕も轉がまし彦右衛門。此時一肚火の如くなつて熱汗瀑の如く送り、我にもあぶで握る拳、むき出す眼、噛む唇、思はせ知らせ唸り出す聲と野牛の吼るが如く、沈みて底に力を含み、好いの、とバカリ短に答へて、頓て隠居の前は泣き倒れぬ。

第九十三 世の廻轉燈籠のやうなものなり

一生を何のやうに送らむと誰しも思ひざるよあらねど、思ふて定むるよしは難く、定めて行ふよとの尙難く、二十歳前後より四十頃までと富貴利達の妄想さまぐ、と思ひを疲らして途轍も無く好い未來を夢と、それより少しは愁念れ薄らぎ行くよ、小いながら安心決定の巢を定め、兎も角もしと年を経れと思ふた通りにもちるを定めぬ

編後りとなさい

まゝにも行へせ、いたづらに我が空財布を搜つて他の家の貨財の勘定するよといまるが人の一生なり。彦右衛門と幸福か不幸福か一度死生れ地も出入してより松富の隠居の言葉を身にしめ、其慈悲を骨お刻み、其教訓を肺腑に印しとめて、それより豊岐の國にとりまると、幾年を一日のやうに勤め勞働き、怒らせられても怒らず笑はせられても笑はせ、泣きも悦びもせせ、一切他に自分の感情を奪ふまぬやうお心掛けて、ねぶ一丁の別物とあきらめられても闘はせ、たい朝夕のそとと謹み人に下り、交際も義理だけに義理を濟まして、それより深く立入ると我がためも他のためにも畢竟可くないと獨を善くする狹隘な思案もがら今までの放恣よりの失敗の生せざるべき考慮を把り、極々の腹の底への常は頼母しあふぬ動物ばかり跳たり躍たりして居る世を情無く思ひつゝ、機械人形の立働くやうお律義真正

編後りとなさい

直、傍眼使ひもあさき年を経おける其間、随分癩は障るおとも多ありて、悪口も云ひさし喧嘩も爲たくある時の無いではなありしが、しつと耐へて仕舞へを腹の立つとも大抵三日ぐらゐで煙草の火の燃お過ぎて灰とあるごとく去つて終るもの、打ち殺して家鴨の餌にして與きたいほどの奴の顔をも十日見る中よと又見なほして可愛とおもふ點も出るもれなきば、自然に忍耐づよくあり又忍耐の好もしいものあるおとをつくぐ、悟り、嗚呼、淨瑠璃の文句ではなけれど眞實は忍耐ひとつどやと明け暮るに氣を静め情を馴らま行くは色に、夏の鬱陶しくおもひて伐ふんとせし山漆の樹の秋の紅葉に美しき色をあして艶ある風情を人れ眼に示そが如く、萬事時來れば忍耐の徳あらわれ、我にゆれなかりしものゝ我に情あるやうあり來せて、世もよさ左程厭きものにも思へせなり、人もまた左程憎むべくものゝ

編後りとなさい

みにも見ぬまなり、從來は天地が我をを惱ますやう覺ゆしに何日となく雲の色も鳥の聲も我を慰め勵ます親切者のやうればはれられ、松富の隠居が云ひしよどの虚言ならざるを月に歳に悟り、くれぐれも嬉しきものに彼時の訓戒を記して、爲ることは異ふぬ鯨魚取ながし持つ心は往時に異なる柔和三昧、あらましと發心入道の人のやうよて、妄語殺戮偷盜の諸惡業を夢にもつゝしみ、慾も淡く道に勵めば酒に耽けることも漸く廢え、遁らぬ閑に悠々と消光けるが、さるおても折節思ひ出づるに新太郎の事。曉天の眠り覺め際に、我をお新とおもひくか同衾の床の中我が胸のあたりに柔輭く小き手して乳房のき揉る様子、可憐のもれやと抱きしむれば阿と泣き出と膝をまぎりと聞き、とつと驚いて眼を開くに、夢とささとぞあがら猶耳の底で其泣聲のするやうればはれ少時の茫然と我を忘れ、今頃は何處の山

編後りとなさい

如何なる野末の里に何のやうか人の手で育てられ居る事々、はいしは彼時不幸おして天の保佑を得終りしかと、ろいろに悲み歎ずるをまぬられさすける。あらく年経るほどに彦右衛門いつし雨鏡に霜の侵す年輩となす、松富の隠居は肥前壹岐の夜父のやうな男兒共にも儼ほどの涙をこぼさせて目出たく大往生、おもへば故郷のなりのしく、また老る年に骨折り業の長くも出来ねば、貯蓄の金銭のさあつめ、主家にも使役へる男たちおも惜まれて美まう彦右衛門壹岐を立ち去り、京都へまど里と惣五をこじめ、佐十郎さま、先主人の庄兵衛さまも尋ねたく、餘所あがら井桁屋の盛衰お俊さまの何なぞもか知りたきやうか知里たくさきやうか心地はるま、次手に廣島の人々も尋ねんと心ざし、馬關より廣島にいたし、互ひは無事によるこび合ひ、殊更銀次郎に充分立派な餞別せられ、また今更

に心地よく、日數へて京都に着きしに、驚きあきるゝ井栴屋の始末、知れ合ひたほどの人々の榮枯浮沈、さくも世は廻轉燈籠より早く變るもれあり

第九十四 悪魔のあやつる縁の絲

佐十郎が往時の住居と訪へば其邊に家並も舊見ま風情にいちがひて、それかとれもふ店も無し、尙其所の近隣を一軒一軒覗きこめども遂に珠數賣る商家さへ無きに古き話しれ浦島が子のおとよで今れ身お引さあてられ、下田に歸らば尙の事なるべしと物移り星變る世の態あろいろ愉快としあがふ歩き行く前面より杖つきの字ありの姿しく頭よ腰を高く爲しつゝ這ふが如く道をだどり來る老人あり、佐十郎さま若も今生存へ玉と大方と此人れやうあるべと眼をとめく打見やり、近よつて。御老人は御たづね申したきことのあり、此

邊よ十何年ほど以前珠數屋に佐十郎さまとゆふがありし筈あるが、久しく音信さへ絶てて、今來て見まれば當りさへつゝぬ位なるが若し御存知あらば何卒御教へ下さりませぬと問へば、立ちといてつて眼鏡の中よりじろくと彦右衛門を眺め、はて珍らしいことを聞かるゝもの哉、其佐十郎とゆふと我の友達で眞誠な善い人であつたが天道様のおぼしめしよも叶ふた歎、久しい前に遠國へ行つて居た息子も歸り、旅商買をし居た息子も六條お家を持ち、二人の息子よかしづられて珠數店も閉て仕舞ひ、樂隱居にあつゝ人も羨む好い死な様とされたが既十年ばかり以前ちやとの答へ。左様でおざりまするか、有り難うござりまする、それで其惣五様といはるゝの何所よ御いでさりまする、次手よ教へていたゞきたうござります。それの初めの微々たるもので居られたが油屋營業漸々手廣にせ

られて今でと納屋町へ行て筑紫屋とたづねてござれ盲目でも直ぐ知
るゝほどの立派な家ぢや、大方人の二十人もつかふて、諸國の取引
せとしく、何時も淋しい事のゐい店あればと聞かぬとまで親切
云ふて呉るゝが老人の常あり。彦右衛門厚く禮いふと、それより惣
五をたづぬるゝ、成程立派な家ゝ住みて召使ひの男女少からせ、以
前とは異なる生活やうさきば、心ゝ幸運を喜びながら、別し後の物語
り盡きず、此方で權左衛門の亡くなりしこと松富の隠居も亡くなら
れしまと其他生月の事何くれとさく語れば、惣五とまた、女房を紹
介いせ十歳ばかりの小兒を呼びいざしなせして。汝に分れて後如斯
ものさへ出来たよ、ね互に齡も老る筈であるか、阿阿々々笑ひ。
時に汝は幾歳にあつたか、お若い、いやはや我はもう老ぬ込んだ、
井桁屋の亭主のやうに死なぬだけが大だしも、汝の先主人なれど彼

馬鹿とあ、強う我が親父などよも辛勞をのけくさつた揚句、井桁屋
の身代を灰にして仕舞ふて、お俊といふおの逐ひ出され、何やら云
ふ藝妓に突き放さき、菓子屋の吉三が家に食客となつて居た中も
家の親父殿おどれは心配けけたか知れぬ、其中此方の親父殿は亡
くならるゝ、吉三が女房の庄兵衛を厭ふてくるといふ始末、遂に自
分も京に居にくゝなつて吉三に五兩我お五兩我お兄にも五兩といふ
やうな無心を頼んで廻り、一旗あげて歸つておぬりおとせると、大阪
よ下つて行たが、白痴な奴なれば其金も暫時損してしまふたか我
ふて仕舞ふたかしと、詮方無しに青坊主、乞食同様に泣き言云ひよ
又歸りて來る時は我等を始め吉三も弱り果てたが、他人おと似せ吉
三が親切よも引取つて、病人くさく妖物くさくあつた男を世話せう
といふ俠氣お我等も集金し合ひ、何やら樂隠居に去て置いてくやつた

よ、異ることを口走り出し、狂氣となつて仕舞ひ、其時と木屋町に
或る茶屋の主人と夫婦同様にあつて居たお俊を尋ね何か下らぬこと
を云ひかけたとやらで、お俊は情男の頭を打たれ去より、何の疵も出
来もせぬ頭顱を自分れ手で打ち又と柱といはず壁といのせよ打ちつ
けごと、此頭を斯打つたあ、お俊めればぬてゐると狂ひまはり、其
が根にあつて往生まよと心うらとといへ少しの惘然を譯、我等も縁
につるがれば自然お俊が憎くて、彼奴も何で善く死ぬべきやと吉三
と共に噂えたれど、悪運つよくも今尙全盛、人の口では庄兵衛と別
れぬ中より忍び逢ふて而も其男は女房を追ひ出させ、後へ乗り込ん
で切つて廻したる中其男の病死、其より後家をたて、商賣は油断な
く、次第に家をも立派おして今でも威張りきつたもれ、好い婆にあ
るあから商賣は縁、金に力で俳優を買ふとか男妾を置くとの随分華

美よ世を渡つて行くよま、吉三といふの汝能く知りて居るの居ぬら
知らぬと感心な男、例の庄兵衛は世話焼せ一件で我の近しくなつた
が、人おと親切で自分れは持ぐ一方、其又女房が實お褒めてよい女、
我が味も實お褒めや此やれ濟みて後吉三は世話で貰ふたれなりと變ま
り變つたる人々の噂、聞いて其夜の睡られぬ。翌日の惣五の案内に
佐十郎はじめ庄兵衛おとれ墓参えて、吉三が家をも音信れ、夕照の
空うつと明るき頃立歸へふんと三條小橋にさまかゝる時、悪魔があ
やつる縁の糸、まぶ前世の因断れはくさる歎、避んとするに間の及
ばぬ、齡ころ老たれ未だ萎れぬ五十の坂を越たるべきお顔水々とし
て生氣の充てるさへ見るよ面憎きお俊お逢ひぬ。

第九十五 少時無言の中お厭な心持無類

緋縮緬の蹴出しは火焰の如くして古來幾多の英雄の身を焼た、くゝ

りぞめのしおき帯は天晴善人の頸に纏ひつれて折角の男を悪趣に引
き倒し去る浮世、思へば齒ざしり爲ながらの女嫌ひが多れも無理な
らず。彦右衛門前にいお俊にあやまちを仕出し後にはた新に我の生
命さへ危ふくせふき、遺恨頭上より脚の尖まで充滿て爾後の女とい
ふものを蝮蛇より忌み悪み、何一つ怖ることなき性質ながら此づけ
を雷より地震より怖れて、ありろめにも男女の紛紜、戀の恨の色
情愛のといふまどを聞けば耳を掩ひ顔しかめ、唾津吐きぬだして胸
を悪がり、心底つよく憎みければ、壹岐ある間も幸ひお面倒なる
ことと仕出かさば、好からぬ業因の種子を蒔くこともせせ厭な果報
を受くることも無く、私にみづゝら無事を悦ぶおつけて、是も畢竟
の諸悪の根源たる婦女に近づかねばこそ安樂を得るなれど、愈々婦
女を忌み避け、あだめかましく艶氣あるまどを馬の杵の破壊たるもの

もやうお無益らしく思ひ、臘脂白粉と仇敵として日を送り年を重ね
まお、今しも惣五と打連れだち、往時の知人の家を訪ひ墓に参りて
の歸るさ、しかも庄兵衛が墓前にて惣五こそ知らぬ腹の中にてい
昔の下なる先主にむかひ、我が罪深く懺悔して、其時ひとまはお俊
と憎む心深くありしばかりなるよ、偶然こゝよ出逢ひて、往時をお
もへば流石よ胸のどけりと躍り、憎み厭ふ心と慚づる情と一時に發り
て、血の逆上し顔はてり、何とぞ知らせ其所と走り去らんとせしに
我が心も會せぬは無理ならぬまとながら惣五は悠然と立ちといまり、
意地悪くもお俊と寒暖時候の挨拶、自分も立ちといまつて一別以來
の挨拶を何れ仔細もなき中ならば爲べきお、水かけられし蛙の如く
おのあり得ざる理由のありて指を弾くは冬の間も耐へ忍び難く、遂
よ一目散に走り去つて惣五が家に到り、さまざまの念慮は使はれて

惱とけるが、少時して惣五たちもぞ。何とて舊は主筋あるれ俊お、
假令バ庄兵衛が有様は話を我ら聞て汝は悪い婆とれもふよせよ、
挨拶もせせ草駄天ばまりに逃げ退きたるの、先方では我が同伴を汝
ときいて何故言葉も無く走り去られたかど不審顔、一杯の酒と何は
なくとも汲み合ふて盡きぬ縁の奇遇を語りなせしめてもあるべきよと
我ら恨を云ひ、久まふりにて遇ふたとなきば互の無事を悦びあふ
て妾が主人とあり、往時の主従の縁とされれば顔知り合つた仲だ
けに昔語を下物よ一夜の宴ひらくおの事の爲たければ、今夜御さ
しつゝへなく彦右衛門御同道よてお遊びにおいで下されさいと例
の言葉上手に我に頼むがと云へば、彦右衛門身ふるひをして縮み
あがり。途方も無い事、厭なり厭なり、惣五殿何と返辭をされまし
たか知らぬと到底ふたへ顔を見るも厭なり。何故また左様つよく

彼婆を嫌ふの、左様とも知らせ我と又、ろ色の面白あるべし幸よ今
夜さしつかへも無ければ彦右衛門引た連を伺ひませう其代り御馳走
の澤山して下されたく御正客より此我が願ひますと戯言さいて別れ
うとしたれば、抜目の無い彼婆め笑ひながら。来臨の必然なるは
知れてあきと萬一御來臨の無くはお前様とれ恨み申まよ參上まする、
書餅準備をさせて婆を來るか疲勞にかけ玉ふなど言ふたを聞捨お別
れて來たが、いよいよ汝行のぬとあらば必定迎へと遣をべし、ろれ
よりの我も好かぬやうな女なれと彼婆がところへ、夕飯了へて後行
のうでは無いのと様子知らぬ人の長閑ある徳憑、彦右衛門はよく
驚き、首を左右に振つたまよ少時無言なる中の厭な心持無類ありし
が。我は是よまね暇申し直よ東都お歸りませうと突然に言ひ出して、
惣五を何事故ぞと怪しませける

編後りとなきい

第九十六 御臨終の節ふいせめてお傍
我が舊悪を云ふと厭なり、云とねを彼婆めに面合はすことを嫌ふ仔細の聞ゆ、彦右衛門弱り果て急に惣五の前居るも悲しくあり、逃げ出したいたいやうな氣持の仕て思ひ告歸いたませうと云ひ出せしが何事故ぞと問かへされて、輕卒の言語また今更耻うしく、押立尻せし身を復び坐に安置て、額に流るゝ汗拭きあへる會心の友おと藏すことなく一部始終を物語せば、惣五も是はくどばうり、少時は二の句を吐死得ざりまが。過ぎたるおと追ふとも及ばぬ、其様あ理由わらば成程汝の潔白あ心あらと逢ふも厭なるべけき強て言葉を彼様な怪物に交へ席を同うせよと云とじ、然し此儘避けて知らぬ顔も思々し、此所一つ手紙といふものよ婿と明けさせて、恥を知らぬ彼怪物婆めに此方と耻を知つて居るものぢやといふことだ

編後りとなきい

けを見せつけて少と耻辱をおぼせさせて呉れるが好かるべし、而して我等何所ぞで今宵一夜をおもしろく飲み明さんと道理ある異見あがら、とづかしや其手紙書ける手持たせ、若しも自身筆とふるゝならば又他に憚ることなくおもひきつて秘事まで書きあふすもあるべけれと、文字知らねに他に頼む不便さ、腹は三分し紙よとあらとせせ、彦右衛門また是に任せ入りしが外あらぬ惣五爺の代筆にやゝ遠慮も薄く、久しく御無沙汰つらまつり候、此御無沙汰の御詫いつかまつらせ候、爾後さまぐ御様子御變りあらせられ候へど猶御運よく御榮ゑあるよし先御芽出度こと歎と存じ申候、庄兵衛様御墓に心ばうりの阿迦香花今日わたくし手向け申候へど御前様御宅井桁屋と懸暖簾無之について御闕をもまたぎ越へ申まゑ候、御招き下され候はありがたくおぼせ候へど御前様は心強

編後りとなきい

くは候のぬ我等れそろしく候て參上つうまつりうね候間ひふに御免
かうむり申候、御うげ様にて随分苦しみ申し漸く御前様の御招きに
の従ひ申さいるはどれものと相成り候ふついでには往年の御恩きつと
ありがさく存ぞ居り申候、御心持よく朝夕御送りあさを候よとよは
存じ上げ申候へども尙まことに御心持よく朝夕をお送りなされ候哉
と恐ろしき御恩うむりたる我が身よりの愚も心配まうりあり候
が如何よござ候や是お案ぞ申し上げ候、今生にては到底御眼にうゝ
るまじきつもりよて明日と故郷へ立ちもどり申候が此手紙何卒彦右
衛門奴とおぼしめ下されたく御臨終の節にとせめて御傍にさし置
られ候やう願ひわけ申候立派ありがたき正念おそゝめ申すべき歎
と考へ申候、又此手紙の惣五様に代筆ねがひ申してなれば、自然わ
たくし思ひ候とはりよの出来居らす候とも委細の一々惣五様呑み込

編後りとなきい

まれ居り候へば記臆さしおなる惣五様に文面不確よて御わかざき
ところわし候はば御尋ね下されたく、随分明白きつばと御わかざ
お相成り候やう惣五様よ申しつがるゝと惣五様へとたくし頼み
置き惣五様御承知あされ申候、まづの用事のみにて相止め申し候勿
々として終れば、惣五はそれを僕も持たせ遣りし後、尙鬱々たる彦
右衛門を誘ひ、家のものには何所へとも知らせず立出て愁を掃ふ酒
をや侘めし、夜ふけて歸り眠りける。
彦右衛門其翌日とお俊を除死て知れるやどの人々よ別と告げつ、故
郷をさして歸里を急ぎ、下田よ着きて叔父を問へば影も無く、一家
死よ絶えて番頭づとめせし幸助とかいふが店の繼ぎ居れど是また微
祿して昔時の俸なく、然も彦右衛門が確と顔記れたものでもなけれ
ば相談相手よなるべきよしも無く、是非なく心細けれど生れし土地

百八十二
ゆかしく蓮臺寺に行きて、何卒有つたる金を基に手堅く此村で一生を終らむと村の景況を考へ調ぶる中、とかうす逢ひしと下田で悪戯の朋ありし此村生れの圓藏といふ男、おれに一切を頼みて田地を買ひ家を購先、何やら尻を落着けぬ

第九十七

瀑布の末に流れは緩きもの

獨身住居も心は大望ありてあらば随分成るべし、普通の男おては足手纏ひの女房持つは厭と剛情張りても三十越して後と自然分別の老父くさくありて相應の縁よよかせ身を固むる覺悟に及ぶもれなるよ、況して彦右衛門と四十も既越たり、まさ故郷へ歸り來しハ身を固めて餘生を長閑に送らんと然なれば、心よ好き妻を得たき望みのなきにハあらず、さうさながら重ねく、婦女は心の解めるもれと身おしめて覺ぬこみたれば迂闊おの持ち込み來る縁談にも應せぬ。雇ひ入れ

し忠助夫婦は可成れ農夫なましし秘藏の娘は勞咳とかいふ長々しき病氣に固より多くハあらざりし田畠と藥代醫師の謝金と代へて本復を祈りしよ水も呑み得ぬ貧とありし擧句、禍災の神に身代と共に其娘をも併せて奪ひ去らき、悲哀の上お窮の重なる不幸、夫婦とも身を投げて死あむか首縊して可愛我が子の後追とむかよで愚直なる心より世と果敢無み、何事も手よつかせ聞ぬ困しみしが、圓藏此事を知つて不慥に思ひ、丁度彦右衛門が買ひし地の中にも舊は忠助の所有なまししが有りしを縁に委細を話して彦右衛門お助けて遣つていとれ勧め、それを承知して彦右衛門二人と慰め勵まし、日と泣いてばかり送るものあらせと説き諭し、少しの借財を濟して遣り夫婦を我が方お引取り去が抑々の發端にてそれより、夫婦ハ深く彦右衛門を有難がり一村のものも此話し聞て何日となく慕ひ寄り、殊

編後りとなさい

小前のもの小作人等と時経つに従ひ、寛大にて頼母しげある彦右衛門に懐き親みけるが、分けて忠助夫婦は生命の親と大切よすまば、何も彼も二人に任せて朝夕の安ふかを送るものゝ、萬事よつけて一人住の物愛く、また他の人の貧しくの生活ながも子といふ寶を目前の樂み行末の樂として美しく世を過すを見るよつけ聞くにつけ新太郎戀しくなり、今の子なきこと悲しくなり、如何なるものもあれ迎へ取りて其よ我が墓へ香花手向くるもの生ませたくのれもへど、つくぐ婦女の紛紜を起す基と知居るにぞ心の中は淋しさも眼前の不都合も忍びてありけるが、忠助夫婦圓藏が親切、何よかして貞淑き女を彦右衛門に添へせんと百方訪ひたづね、やうやく某村の誰が娘お如是のものありて容貌さのと美しといふよもあらねど才智勝れたりといふよもあらねど學問ありといふよもあらねど唯女

編後りとなさい

らまき女なりといふだけの確實なりと聞出し、手を廻して大概虚妄あふと探り知りし上、扱汝も何時まで獨身でも有り得じ如是々々の女を我が世話せんに思案の何ぢやと圓藏が兄立ちての勸め。篤と先方を突き止むるも、何や才發けよもあらず全きりれ愚鈍にもあらざる様子なれを、心操も大凡か知られわたりて、其上の望を我が榮耀お云ふべきよもあらねば異議なく承知して圓藏が媒約に目出度高砂を誦ひはやされ。其後は平々凡々浪もかく風もなく起きて働き睡つて休と、身を堅く持ち心を和しく持ちて過すよと一年一年又一年、お染をまうけて男子ならぬよ失望はまかか少可愛さよ女なれをひとしは、唯此娘を善くせうばの里にかゝりて寵愛お餘念あく、田畑の世話稲麥の面倒見るも畢竟と娘のために娘のためにと計りて勤めけるが、財産は松富の隠居が腹を其儘うつせる彦右衛門

編後りとなさい

上よ立ち、唯一筋み主のためかもし忠助夫婦下あれば自然に肥大
り行て、一家ますく、豊なるにつけ個々の心も荒び僻まき、時によ
り節に觸れての善根を積み慈業を爲せば一村の者も妬を思ひことあ
く、雍々熙々と清康安樂よ過ごせしよ、或時京都の惣五より書狀到
來、人に讀ませてそれを聞けバ初めの何事もなき通列の冒頭、中
ろより下り都て知れる人の成行なるが、驚かるゝの彼お俊が末路あ
り

第九十八

此頭願を斯う打つた

作を物語の因果應報之餘りに巧く循環るもれあがら實際の作り物語
より尚巧く善惡の報それくゝよあるもれなり。近き例が牛可愛がる
牛飼と牛れさめよ説られて荒山中に野宿れ夢安く、鰻屋の小兒は鰻
の怨念でといふ譯よあるまじけれど多くの眼耳あど満足あらず、

編後りとなさい

天地れ機關妙奇不思議れ活動よて死靈も取憑き生靈も祟り呪咀も必
ず験くに相違なし、何も此世が厭にあまました冥土うら彼奴が招で
居るお違ひさいなぞと自惚て一切を茶にする男なんどれ了解るとに
とあらず、お俊ひとたびと惡運つよく榮わしが彦右衛門に不圖逢ひ
しが心の中お龜裂の入と初め、彼薄氣味わろき書簡受けて其時は何
とも思はせ。下りぬ嚙語と吐く奴かちと冷笑つて済しけるお、何時
とあく商賣淋しくなり、取りかへさんと焦躁れバ益々面白からぬ左
り前、下り出して之天秤も片荷づりたがる道理にて自然々々と遊團
扇に煽ぎたてられ、鴨居鴨居も艶氣の抜けるやうなり行きての客商
賣とひとし得物悲しく衰へ、寄る年波よ憂れ皺を疊とて、水々とし
た容顔も流石に憔悴れ、見る陸もあき普通の老嫗と、化けて仕舞ひ
し擧句、多年れ酒お荒と色に耽まし天罰報い來て性の良かぬ病に

編後りとなさい

罹り、誰介抱の仕手も無き身の味氣なく、藥煎ぶも粥煮るも金錢づ
くれ他人の世話、其心細さ如何ばうりなりけむ、かてゝ加へて漸く
病の重るよつれ彼事此事おもひ出づるより自然ある心は病まで引き
出し、彦右衛門めと叫び庄兵衛殿と呼び、堪忍して堪忍してと唸り
騒ぎ、獨語より變じて人の顔を見るや否や直に。庄兵衛め復妾を責
めに來たか執念の深い、嗚呼妾の悪かつた免して玉はれ、汝が悪い
妾を恨むことか、何の發端とといへば妾が悪いのでない、此頭を
斯う打つゝ、痛々、免して、汝彦右衛門め小癩にも妾は臨終を冷笑
かうといふか、と誰彼の差別なく罵り狂ひ、末には自ら我が手で我
が髪かきむさり我が爪爪て我が顔爬き破り、眞實の病氣よりは精神
の病のげしくなつて、七轉八倒の苦と四苦八苦の惱と小身を虚空に
揉み床に打ちつけ、ひよろゝと立ち上つて柱に觸れて動と倒れ、

編後りとなさい

又這ひまはりてと障子に衝突り、關ひ人もなき室内に獨り煩悶せし
後、兩手握りつめ兩眼見開き齒を切つての悪最期、見しものさへ氣
味を悪がまて二三日と其あさましき面影忘るゝあたとさざしほどな
りしどろや、親屬もあけれど町内の者厭ながら世話して捨つるが如
く非り果てまが、其後お俊が家よりの幽靈出づるの風説さへ立ちけ
るよし、此あらまし惣五よりの手紙も知つて彦右衛門舌を捲き恐れ
驚きますゝ善にすゝとける

第九十九 用もない手紙腹だゝし

歳月は待つに經つと遅けれど、知らぬくの間過ぎ去ること奔馬
流水より迅速に、何事もあく三年五年と消光し行く中、お染漸く美
しうなりまさり、昔の花の朝暎に匂ふ風情もあしく生長てを、我が
髪の毛の薄うあり我が肌の皺び我が眼の力さへ海上遙ある相圖の小

編後りと なき い

旗見逃さうりし往時ふと及びもつかぬまで衰へ行くことも忘れて、
只管娘寵愛に餘念なく、朝起きるとより夜睡るまで唯々お染三昧、
其笑顔の罪のなきを見てと我もまた罪も無く笑ひ、其何事かに機嫌
悪くしたるを見てと我もまた心地を悪くし、一身の喜怒哀楽ことごとく
くお染が上に與けて、我とあれども無きが如く、生命とも神ども娘
となして果て我が女房までを我が兒の従僕のやうと思ひあし取り扱
ひ、何にまれ彼にまれ娘好かれ娘好かれと其詮議ばかりに二六時を
費しつ、殊更我が無學無筆を身にしみく、悲しく思ひたる事のあれ
ば同じ耻辱を可愛子に被らせまゝと早くより讀書習字を仕込み、
天稟の鈍根うらで一列の他家の娘達よりは進歩鋭く、群に抜いで、
物の道理も能く了解し、且又静淑なる性質が自然と爲する勉強も、
何時しる學校出て後も學問好きの癖をなし、數々の雜書讀み耽り行

編後りと なき い

くまゝ齡にはませて我が知らぬ道理をさへ時に云ひ出づることわ
るにぞ愈々嬉し悦びて、疾生長せよ良き筆取らせて孫生ませ、初孫
の顔見て我が世を終へんと唯それのを樂まにして、老後の慾を一
つに堅め、餘り感心するところの無き老妻に満足ばかりにして居ね
ど、氣の小さくて狹隘な根性の厭きとれもふことありても其女が産
んだお染の可愛さよ不足も堪忍し、波かく風なく、若い時の容氣を
歛めて、家内の者よ固より柔和く、召使ふ農男草取女にまで親切
を旨として交さば、何處より一點彦右衛門を悪いと批難の爲様もな
く、言語交とはさぬものに難有がふれて自分も悦ばしく年をとりけ
る幾年の間、まそく穩和な阿波の鳴門より恐ろしと馬鹿者が嘆せ
ま世の海を渡りけるが、お染不圖せし一言より東京見物に出でし歸
路、軍艦を見舞ふて往時知り合ひの男と撞見ひ、そればかりにても

編後りとなさい

懐舊の情動き今昔の感湧けるに、よしてや記憶の印の眼尻の黒痣、
たしうよ我が酷くも捨し新太郎と思はるゝ士官は出逢ふて、胸は大
路お車走る母と顔さじたり、流石お粗忽る言葉は年の功だけに咽喉
まで出掛りしをも抑へて出さざしが、突き上りくる種々の感に茫
然とそるまで精神を奪はれしも、人の見る前あれば氣を落付けて知
ふぬ顔を繕ひたる其苦しき、枕山亭で水夫より大概と聞けば聞くは
ど氣性も似たりと親兄弟も無き様子なりとか、思ひ合す節の我が
迷故か知らぬを多く、いよゝ心に掛て家に歸つて後も我が魂魄
の抜け去つたるごとく其士官が傍はうり眼前にちづつき、徐に憶ひ
起す何十年の有爲轉變、我ひとり知る我が罪に人こそ知らぬ惱み苦
しみ、彼時彼様もせざりしなれば、其時左様も思はざりしあふばと
悔んで還らぬ身の業をつくぐ敷へ責むるのみ、爲すべきことも爲

編後りとなさい

すお懶く、漸くお染に對つて有てる情も其事に奪られて薄くあり、
偏お彼水夫よりの手紙も來るやと待つばかりあるお、望めると來で
案の外に一日お染が、父様東京より郵便がといへるを、誰よりと問
へば同伴ちて艦に行きし彼磯貝といふ男よりの書状、るゝ無益しと
おもひおが讀まして聞けば何の事はなく唯此後も御交際申したさ
とばうと、用も何もあいな元文句花やあるものなまけま
其後程経て書生二人に氣の利たる犬一匹従へ、洋服の獵裝束小氣味
よき風情したる紳士の通を過ぐるに村とづれの柴橋のふどりよて梅
吉出逢ひ、不圖鳥打帽子被つた男を見れば何日ぞや我を窘めたる書
生あるに、やあ汝のと聲あければ、先方でも汝のと聲あけて立ち留
る途端、此方で先方の主人とまき立派る人を見れば、我と免えて呉
れたる彼黄金縁の眼鏡で確と記憶に込とたる磯貝さま。旦那様あ。